



ターナー、
光に愛を求めて

シネマ気球

第35号 200円

シネマ気球©

編集兼発行人 関田孝正
〒270-0107
千葉県浦安市西栗井 339-2
TEL 04 (7153) 1533
FAX 04 (7156) 7122

「ターナー、光に愛を求めて」

絵画ファンにおすすめ

映画のオープニングで、二人の女性が会話しながら川岸を歩いていく。続いて荒涼たる荒野を歩く、小太りで短足の、雨傘をステッキにした一人の男ターナーの姿をカメラが追う。馬の群が彼を追うように続き、観客は物語へと誘われる。

映画「ターナー、光に愛を求めて」は、画家として成功している彼の人生の後半生を描いた作品で、画面はターナー絵画の色彩世界を意識している。第67回カンヌ映画祭で最優秀男優賞を受賞したティモシー・スポールの独特な風貌と演技は、ターナーの絵は知っていても、画家の経歴を知らない私にとっても、ターナーという人物はこんな人だったのかと納得させる説得力があった。ヨーロッパ各地をスケッチ旅行したターナーは、イギリスの家に帰る。そこにはターナーそっくりな父と、家政婦が待っている。

物語はターナーと父との関係を中心に、彼を取り巻く女性たちとの話が淡々と映し出され、時には退屈さを感じさせるかもしれないが、絵を描く私にとっては、物語の合間の絵を描くシーンや、ポケットに入る小さなスケッチブック

に雄大な大地や、空、海を観察しながら鉛筆を走らすターナーの姿に畏敬の念を感じ映画に見入った。特に嵐の前に、船のマストの上にロープで体を縛り付けて、荒れ狂う海を観察する狂気に近い画家の気迫に圧倒された。

また、大きなキャンバスに太い筆でのびのびと描くシーンでは、絵の具の伸びをよくするためか唾を吐きかけながら大胆に勢よく描く様に、こんな描き方ありかよ！とおどろかされた。同時代の画家たちとの展示会場でも、彼は他の画家の絵に刺激を受けて、会場を出て赤い絵の具のついた筆をもつて戻り、完成したはずの海の絵の真ん中に赤い点を大胆につけた。画家たちが驚く中、彼は平然と波に沿って赤い絵の具の下半分を布でふき取り、残った赤い部分を、波に浮かんだブイとして完成させ、皆の喝采を浴びた。

後半、大富豪から、ターナーの手元にある全作品を高額で買い取りたいとの言葉に、絵は国にすべて寄贈すると拒絶。

臨終に際し、「太陽は神だ」と言って目を閉じた。この映画、絵好きは、観るべし。

(絵と文・山下雄平)

昭和最後の大スター 高倉健を悼む

今市文明

ああ、健さんが逝ってしまった！

だったのです。デモとストライキ、集会に明け暮れ、学業はそっちのけとなり、卒業までに6年もかかりました。あの有名な1969年の東大安田講堂陥落の2週間前に山梨から応援に駆けつけ、1日おにぎり2個で闘ったものです。

あの頃、私たちは「佐藤内閣打倒」「アメリカ帝国主義粉砕」「沖縄を返せ」などと勇ましいシュプレヒコールを挙げていましたが、そこに全く風穴を開けることができないという焦りがありました。そんなとき、町の小さな映画館で毎週末ナイトショーが行なわれており、長い会議のあとの気休めにと、よく通ったものです。館内は一般人に混じって、私たちのような学生生活家もたくさん来場していました。上映作品は決まって健さんの「やくざ映画」。

健さんが我慢に我慢の末、堪忍袋の緒が切れたとばかりに「斬ってくる」と、敵陣に乗り込み、渡世の義理のために「死んでもらいます」と言って、敵をばったばったと斬り倒す。観客からは大きな拍手と「異議なし」の声。当時、私たち活動家の間では、反動的な言動には「ナンセンス」ということばで応じ、文字どおり闘争心のある言動には「異議なし」と言って協調していたものです。映画が終わって館内を出た私たちは、スカッとした爽快感に浸り、壁を突き破れない日頃の鬱憤を忘れさせてくれました。みんな肩で風を切り、「健さん」になりきって出て行ったものです。

この当時の健さんは、私たちにとって「頼りになる兄貴」であり「かつこい男」、すなわち最高のヒーローでした。

偶然、俳優になり、雌伏期9年

生涯に205本の作品に出演した俳優・高倉健には3つの時期があります。

第1期は「雌伏期」。大学を卒業して、いったんは福岡の故郷に帰るものの、再度上京して「食べる」ために映画会社の裏方に就職しようと面接を受けていたところ、東映の大物プロデューサーの目に留まり、「俳優になってみないか？」の声に押されるまま俳優の道へ。

1カ月間、俳優座で勉強させられましたが、まるつきりその気のない素人ですから、「おまえは俳優には向かない」。そこで立って見ていなさい」と言われるばかり。それでも「電光空手打ち」というB級作品で1956年にデビューします。「ドーランを塗るのがとても嫌だった」と語る健さん。同じ年「太陽の季節」で華々しくデビューした石原裕次郎とは好対照でした。

1959年、当時人気絶頂の江利チエミと結婚したときには意外でした。マスコミも「江利チエミ、高倉健と結婚」などと報じ、まだまだ無名に近い健さんはつねに格下扱いでした。

私が初めて健さんの映画を観たのは1963年の中村錦之介主演「宮本武蔵」の佐々木小次郎役からです。スラリとした長身に長刀を背負った健さんの姿は、文字どおりそれが私に「佐々木小次郎」のイメージを植え付けてくれました。それから2年後、私が高校3年のとき、大感動して観た内田吐夢監督の「飢餓海峡」。この作品で健さ

2014年11月10日。俳優の高倉健さんが亡くなりました。(享年83)。私は「まさか」「信じられない」という気持ちでいっぱいでした。80歳は超えているものの、老いを全く感じさせず、まだ1〜2本は大丈夫だろうと思っていたのに、あの健さんが逝ってしまった！。思わず私の目頭に熱いものが込み上げてきました。私の20歳前後の青春時代に思いが至ったからです。

私は山梨の大学時代、いわゆる「学生生活家」でした。俗に「全共闘世代」と言われますが、主義主張は異なるものの、私もその1人

んは正義感の強い1本気の若き刑事に扮し、殺人犯役の名優・三國連太郎と一步も引かない対峙が見事でした。

仁俠映画のヒットで人気沸騰

そして同じ年、9年の雌伏期を経て、ようやく第2期の「人気沸騰期」を迎えます。

「網走番外地」「日本俠客伝」「昭和残俠伝」などの東映仁俠映画がスタートし、健さん主演のその映画はどれも大ヒット、1972年までそれぞれ18、11、9作品とシリーズ化されました。前記のとおり、ちょうど私の学生時代と符合しています。

しかし、映画産業の斜陽化は押しとどめられず、東映が仁俠映画



『新幹線大爆破』

の製作を打ち切り、健さん自身もイメージの固定化を嫌い、東映を退社してフリーの身に。江利チエミとも離婚し、「ゴルゴ13」などに出演していましたが、1、2年は自分のスタンスにまだ戸惑っているようでした。

『黄色いハンカチ』で大スターに

そして1977年から第3期「国民的大スター期」を迎えることになります。

その契機となったのが名匠・山田洋次監督の「幸せの黄色いハンカチ」でした。健さんはこの作品で、背中に憂いを背負いながら、一生懸命生き、妻を愛する庶民の大人を演じて、新しい健さん像を生み出しました。この作品以降、健さん人気はかつての仁俠映画が男性ファンでほとんど支えられていたのに対し、男も女も全国民に広がりました。まさに国民的大スターになったのです。

「八甲田山」「南極物語」「海へSee You」など極地での過酷な演技により「極地俳優」と呼ばれたり、「冬の華」「駅 STATION」「居酒屋兆治」などでは男の哀愁を漂わせ、「あ・うん」では軽いコメディにも、また「ブラ

ック・レイン」「ミスター・ベースボール」「単騎、千里を走る」では海外映画にも進出しました。そして晩年、「鉄道員」「ホテル」「あなたへ」と感動作に出演して人生を終えたのです。

先日の朝日新聞に「あなたの好きな健さん映画は？」というアンケート結果が掲載されていました。それによると、上位20作品は、①幸せの黄色いハンカチ(1977年)②鉄道員(1999年)③八甲田山(1977年)④あなたへ(2012年)⑤南極物語(1983年)⑥駅 STATION(1981年)⑦野生の証明(1978年)⑧居酒屋兆治(1983年)⑨ブラック・レイン(1988年)⑩ホテル(2001年)。以下⑪網走番外地⑫遙かなる山の呼び声⑬新幹線大爆破⑭動乱⑮飢餓海峡⑯君よ憤怒の河を渡れ⑰昭和残俠伝・唐獅子牡丹⑱あ・うん⑲四十七人の刺客⑳単騎、千里を走る。

上位10作品がすべて「国民的大スター期」の作品だということに注目してください。それにしても昭和最後の大スター・高倉健さんの死は残念でなりません。健さん、ありがとう。さようなら。

●かつての撮影所の映画作りの実際を裏も表も率直に書いた本だ。とても面白いし、映画によせる思いに感動した。(映画評論家・佐藤忠男)

●ちよつと異色の本である。ピュアな映画愛と趣が違う。

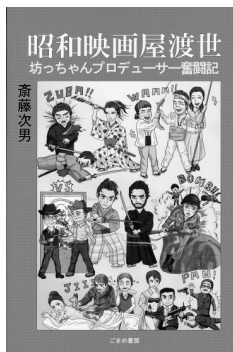
●『キネマ旬報』映画評論家・尾形敏朗)

●映画界の盛衰、1作が完成するまでの映画人の苦闘、華やかな世界の内幕や裏話を軽妙な筆致で伝え哀歓がにじみます。(『しんぶん赤旗』)

●プロデューサーならではの視点で綴る泣き笑いの奮闘を通して、巨匠から俊英まで監督、俳優たちの素顔が生き生きと描かれる。担当した名作や歴史に埋もれた映画の裏話も興味深い。(『出版ニュース』)

昭和映画屋渡世

坊っちゃんプロデューサー奮闘記



斎藤次男・著 四六判256ページ
2376円

ごめ書房
〒270-0107
千葉県流山市西深井339-12
電話 04-77156177
FAX 04-77156122

シネマギャラリー 13

鶴田 聖



「描き手からの蛇足」今回は、高倉健と菅原文太でいきたかったのですが、どうにも一枚にまとまらない。泣く泣く健さん一人にしたものの、デビュー作から遺作まで網羅するなんてとても無理。結局、高倉健が一番颯爽としていた任侠映画の健さんを集めたイラストに落ちついたという次第なのです。最初の構想の名残りなのです。

参考映画＝日本侠客伝シリーズ／昭和残侠伝シリーズ／網走番外地シリーズ／人生劇場 飛車角／山口組三代目／ザ・ヤクザ
高倉健以外の人物＝鶴田浩二／池部良／藤純子／菅原文太

任俠と“老惨”

鈴木輝夫

衝撃が走った。衝撃が奔った。衝撃が飛んだ。衝撃が跳んだ。どんな漢字を使ってもそれは正に衝撃であった。思いもしない大衝撃であった――。

片田舎に逼塞している阿呆なおっさんの感受性は、驚く程の恐ろしさで磨滅して仕舞い、世の中で日々起っている大抵の事柄には大して驚かなくなり、各所で火山が噴火しても、各地で地震が頻発しても、メルトダウンした原発から未だに廃液が流れ出ても、長年に渡って大誤報を放置した大新聞社

の社長がやつと辞任しても、「ああ……そう……」ぐらいのいとも軽い反応であって全く驚きはしないし、更には、アラブの一面に丸で七世紀然とした似非宗教国家らしき地域が出来かかろうが、広大な国土を誇るロシアや中国がその強大な武威を以て帝国主義化して行こうが、米国の次の大統領選にクリントン元大統領の女房や、ブッシュ元大統領の弟が出馬の動きを見せ様が、これまた「ああ……そう……」程の極々軽い応答しか出てこないのだ。

若い頃の私であつたなら、記した事象の如きには立ち所に反応したであろう。己がそれらの事象に對して、果して、曲りなりにも正しい見識を持っているかどうかを全く熟考もしないで、立ち所に反応して賢しらに延々と多弁を弄したであろう。それに因って、手酷いしっぺ返しを食らう事もしばしばではあつたのだが……。

その様な事を数多繰り返しながらも、性懲りもなく、再三再四に渡って同じ事を演じて仕舞うのである。正に、慣性^{なりい}と成る――、である。所が所があるのであるが、全くなおっさんになり果てて仕舞った現在、世界で起こっている様々な大

変な事象にかくも無惨極まる反応を見せるとは――。当り前であるが時は残酷である。当り前であるがもう若くはない。当り前であるがおっさんもおっさんである。

何せ、昨年の秋に年金事務所から書類が送られて来、今年の始めにその手続をしたのだ。世間も認めた立派なおっさんその物。大昔の事であるが、彼の日活スター戸錠がテレビのバラエティー番組で、「エースの錠も遂に年金を貰う歳になりました」と戯^むけ、その絶妙な滑稽振りに大笑いしたのだが、とうとう私もお上から年金を支給される歳になつて仕舞つたのだ。

『噫 無情』（私はジャン・ヴァルジャンか!?）。お上も私の様な偏屈者にも、善いおじさん同様に支払うのだから大変だ。

今年から年金詐偽に気を付けねば……。昔から拙宅にはあらゆる種類の詐偽電話が掛かつて来るのだが、寧ろ私はそれを楽しんでいて、「掛け子」のにちゃんやねえちゃんを長い時間かけてねちねちといたぶつてやる。すると、彼らは必ずの様にボロを出す。おっさんの若者いじめはたまらなく楽しいのだ(!!)。私は『いじ悪いさん』か……。話があらぬ方向に

逸れて仕舞つたので元に戻す。感性的磨滅に就いて。更には冒頭に記した衝撃の内実に就いて。

三十代前半の頃から大病を患い、五十代半ばまで何度も入退院を繰り返した。それ以降、完治した訳ではないがもう入院は選択肢から外した。体はほとんど衰弱し始めているが、その衰弱の極みに居直る事に決めた。何ひとつ満足には出来ない。大病を患い始めた頃から、いや本当はもっと以前から『シネマ気球』に再三記している如く、私には絶えて映画なる代物はない。映画館は元より、ビデオやDVDも殆ど見ないし、テレビ放送される映画も余程の事がないと見ない。第一、私の部屋のテレビは昨年の夏から故障したままである。尤も、正確にはテレビの故障ではなく、アンテナからの配線に不具合が生じたのであるが、どうせ余り見ないのだから未だにそのままにしてある。

別段、私は外界との関係性を無理に断ち切った訳ではないのだが、外で起っている事象に若い時の様に鋭敏には反応しなくなり、大抵の出来事には「ああ……そう……」ぐらいの所でもいとも呆気なく終わって仕舞うのであるが、かといって、

内界、詰り私の思考や感情や情動に依拠してより深く沈潜をしてとことん黙考するでもなく、唯々、無為に任して過ごしているだけである。まあ、それが歳をとったとゆうことであるといわれれば、それまでだが……。

生来なかった感性が歳を取ってじじいになるにつれ益々鈍磨し、外界・内界ともにその認識力は己でも驚く程の無惨さである。俳優・松尾芭蕉の有名な一句ではないが、——むざんやな 甲の下のきりぎりす——である。(てえと、私は斉藤別当実盛か……。そんな善い者である筈がない) 私は飽く迄、唯の無惨やなである。

私とて、その様な無惨さの極みを生きている今の己の状況を、手を拱いてそのまま座視している事に歯噛みする程の焦りと気が触れんばかりの懊悩を抱いていて、何とかして現状を打破せねばと四六時中試行錯誤しているのだ。折りも折り、一筋の光明らしき物を見出した。「高倉健の死」だ。そして「菅原文太の死」だ。

東映任侠映画を長きに渡って支えて来た二人の死は、マスコミでも大きく取り上げられ、テレビ・新聞・週刊誌は勿論、文芸や政治

や経済を論ずる硬派な月刊誌までもが、長大な特集を組んで彼らの人物像や出演した作品をあこれと書いた。視聴率が取れると見込まれたり、多くの発行部数が予想されるとなると、各社、我も我もとその競争に先を争って参加し、結果として驚く程多量の「高倉健論」と「菅原文太論」が出回った。私もその極々一部を見たり読んだりした。

感心した一文や一論あり、不快に思う一文や一論ありであったが、改めて、彼らの存在の大きさや東映任侠映画の世に与えた大きさを認識した。私に取ってはそれらテレビ番組や各論文も大きな意味を持つていたのだが、それ以上に意味のある一件があった。デアゴスティーニ・ジャパン社から『東映任侠映画 傑作DVDコレクション』なる小冊子付きのDVD集が発売された事である。恐らく、高倉健の死がそうさせた遠因になったのである。その創刊号から直ぐに買い求めた。当然としてその創刊号は、高倉健主演の『網走番外地』シリーズの第一作目。

以後、藤純子主演の『緋牡丹博徒』シリーズの第一作目と続き、次が高倉健の二大ヒットシリーズ

の一つ『昭和残侠伝』の第一作目、その次が『続網走番外地』と続くのであるが、この原稿を書いている時点で、十三号目の『昭和残侠伝 一匹狼』まで出ている。都合十三本出ているのだが、早い話、『網走番外地』『昭和残侠伝』シリーズの高倉健か『緋牡丹博徒』シリーズの藤純子かの二人の主演作品のみである。私としては、一番好きな鶴田浩二の主演作品が一本もないのが寂しい限りである。何でも鶴田の主演作品は八月四日になるそうで、それも東映任侠映画の中で一番の傑作と呼び声の高いあの『博奕打ち 総長賭博』になるらしい。

『網走番外地』・『昭和残侠伝』・『緋牡丹博徒』の各シリーズも、その主題歌は何れも大ヒットした。いや、あの主題歌があったからこそ作品が大ヒットしたともいえる。二人とも決して上手いとはいえないのだが、高倉健が唄う所の両シリーズの主題歌を聞くと、何とも切ない悲しさが込み上がって来るし、藤純子が唄う所の『緋牡丹博徒』の主題歌は、痛々しい程に可憐な頼りなさに溢れ、その下手くそではあるが可憐で頼りなき痛々しさが、最後、敢然として殴り込

みに向かう刹那に流れると、観客の昂揚感(うねり)は彌(や)が上にも昂り、来たる可きカタルシスへの大いなる誘い水になっている。

上手い下手の問題なのではなく、観客達の情念を激発させるかどうかの問題である。高倉や藤が憤怒の極みに達した次の一瞬、その苦悶を見せる相貌を「嘲笑う」かの様な「狡猾さ」で、殴り込みへの誘い水となる主題歌のイントロが流れ出す。そのイントロは、丸で「征けっ、健!!」「征けっ、純子!!」と誘っている様であり、更にいわば「惨殺せよ!!」「テロルのだ!!」と指喚(しこう)している様でもあるのだ。

そしてそれは同様に、観客達にも二人を殺戮の修羅場へと誘導せよと暗に求めている。そこで始めて、画面の中だけではなく、観客達とも「連帯成立」となるのである。あの主題歌は、我々を「共同正犯」へと落とし込む為の誘い歌なのである。

そして必然として不死身である健と純子は、連帯の同志の力も借りて殺戮の限りを尽して宿敵やつばらを皆殺しにし(多くの場合、連帯の同志は主人公を助ける為に死ぬのだが……)、最後は駆け付けた官憲に捕縛されるか、深く傷付

いた身を引き摺りながら何処へともなく去って行く。何たる定番。何たる無意味。何たる惨劇。

彼らの殺戮に因って辛うじて守られたかに思える「細やかな共同体」も、恐らく、そう長くはその安寧は続かないであろう。既に、危うさの芽は、正義然として蒔かれた種にこそ宿っているのである――。噫、全くとして救い様のない物語。これは全くの悲劇ではないのであるが、若し神が存在するのであれば、絶対者の御眼には喜劇としか映じないであろう。あの時期、一群の東映ヤクザ映画に何故にあんなに熱狂したのであるうか？ それらの答は多くの映画関係者達、取り分け、東映ヤクザ映画を多く見ている有名な映画評論家達、更には、文学・政治学・歴史学・社会学・文化人類学などを専門とする学者・評論家達からも陸続として出されている。

今更この場で私の幼稚な答をいけしやあしやあ開陳しても、読者諸兄は鼻白むだけであろうし、縦んば蛮勇を振って私の稚拙な解答を書いても、どうせそれは、上記した碩学達の下手な真似事の論にしかならないであろう。であるから、読者諸兄は私が如何に東映任

俠映画にのめり込んでいたかだけを知っていて貰いたい。

若き日の一時期、東映ヤクザ映画を見なければ夜も日も明けずの日々を過ごしたのだが、それ迄の私は高校を卒業する迄ずっと「ムラ社会」の中で過ごして来た。私は何時の頃からか隠微な因習に色濃く染まるムラ社会に耐え難き程の嫌悪感を覚えていて、何としてもそこからの脱出を望んでいた。東京の学校への進学も、勉強し様とする気持ちなどさらさらなく、このムラ社会の堪らなさから逃げる事が出来たらと思ったのが本当の所だ。

ジャンズ高鳴る花の大東京（うんつ、私はフーテンの寅さんか……）は、本当に何も彼も素晴らしかった。私は「解放」された。東京には何でもあった。大東京に痛く刺激された私は、回りからの影響もあり、この際一つ大インテリ（!!）になろうと決心した。事実、私の回りには真のインテリもインテリ振る奴も多きいた。彼らと酒を飲んで話す事で、私もインテリの端ぐらいには仲間入り出来るのではと、そこはかとなく思い

始めていた。華の大東京新宿の有名書店紀伊國屋で、難解この上ない書籍類をこれ見よがしに購入したり、観念に観念を上塗りした抽象的語彙が飛び交う政治集会に興味本位に参加したり、更には、理解するの一方ならぬ難渋を強いる映画も無理して見に行った。

当時購入した書籍はもう我が家の何所にあるのか判らないし、参加した政治集会で飛び交った難解な語彙は、それを十全に理解する前に疾うに忘れて仕舞っているのだが、見た映画は辛うじて覚えてはいる。ベルイマン、フェリーニ、ゴダール、パゾリーニ、大島渚、松本俊夫、実相寺昭雄、足立正生……。今となつては誠に懐かしい監督達ではあるのだが、さて、彼らが真に観客達に訴えたかった事は何なのかとゆう事は、私の凡庸な頭脳では判り兼ねた。今でも、彼らの発した鮮烈なるメッセージを十全には理解出来ないでいる。

上京当初はそんな難しい映画ばかりを追っ掛け、その度に判らなさに呻吟した。そんなある日。難解映画に疲れ果て、気分直しの極々軽い気持ちで東映の直営館に入った。当時東映はヤクザ映画だけでなく、所謂ボルノ路線も進めら

れていて、代表的なのは梅宮辰夫主演の『ひも』シリーズ・不良番長』シリーズ『帝王』シリーズなどがあり、更にはえげつなさでボルノ度をより増した池玲子主演の『女番長』シリーズや、恐らくピンク映画界から引つ張って来た女優達や、倒産した新東宝映画の残党スタッフ達を使つた、何とも奇妙奇天烈などボルノ映画を可成りの数製作していた。

今でも忘れもしない名（迷）ネーミングがある。曰く、『温泉あんま芸者』。曰く、『現代ボルノ伝 先天性淫婦』。曰く、『温泉スッポン芸者』。曰く、『エロ將軍と二十一人の愛妾』。曰く、『東京ふんどし芸者』。もうこの辺りで辞めるが多くはこんな珍無類な題名で、出演していたのは先に上げた池玲子を始めとして、杉本美樹、女屋実和子、賀川雪絵、池島リ子、そして私が大好きだった、新東宝の生き残りである大年増三原葉子。こんな珍奇なネーミングを考えた人物を、無条件で大尊敬する。流石我が愛する東映。実は私が東映の直営館に入ったのは、東映任俠映画を見たいとゆうより、併映されているボルノ路線の方を見たかったのが真実である。その時併映

されていた任侠映画は確か高倉健主演の作品であつたと思つたが、その後、次々と余りにも多くのヤクザ映画を見た為か、もうその正確な題名は覚えていない。

東映ボルノを見に入つたのだから、勿論、それに欲情の焰を煽られたのは当然であるが、それよりも健さんのヤクザ映画に総身が騒めいた。「何てカッコいいんだっ——」。正に漢であつた。秘めた決意が巧まず浮き上る苦悶の相貌。敵が何十人何百人おろうと殲滅し得る強靱なる肉体。親不孝を承知の上で入れた刺青の何たる華麗。

総ての者が「不幸」にしかならない絶対的な不条理に、そんな事は端っから百も承知とばかりに白靴或いは日本刀或いはドスを抜き放ち、背の刺青を血吹雪に染めながら悪鬼羅刹の如くの大殺戮を敢行する。健は極まりなく美しい殺人マシンと化す。何人も彼には敵わない。何人も彼を制止出来ない。何人も彼を刺殺出来ない。

何たるカラストロフであろうか。誰もが不幸にしかならない結末の何たる美しさ。健はヤクザであつてヤクザでない。救世主である。先に書いた様に、彼に因つて辛うじて救済されたかに思える細やか

な共同体は、次の破綻が既に芽吹き始めていて、勿論、彼もその事を感じ始めているし、更には回りの善人達もその全員が薄々感じている。そこには何らの救いの影すら見い出せない。が、無償の或いは無垢の大殺戮の限りなき美しさは、健の至純性の故を以て、否、至純を真底全うし様とする彼の意志の強烈さに因つて、至高の気高さと完全に純化されるのだ。それにしても、何故にこの様な「美しさ不条理劇」が次々と出来たのであろうか……。

東映任侠映画に全き魅了されて仕舞つた私は、それから次々と丸で狂つた様に毎日の如く見始めたのであるが、都心の封切り館ばかりか場末の二番館三番館四番館は疎か、遠く神奈川や埼玉や千葉くんだりまで、面白そうで見の作品があれば足を運んだ。その頃には学校には殆ど行かなくなつており、昼は映画の闇が居場所となり、夜は専ら安い飲み屋が居場所となつていた。

明らかなる墮落であつた。私の家は貧乏な家庭で、親父は安月給の中から仕送りをしてくれていた。送られて来る金額は生活するのにぎりぎりの額であつたから、そん

な自墮落の見本の様な生活をすれば忽ち生活は成り立たなくなり、嫌々ながらも必死の思いでバイトの口を捜した。見付けたバイトは夜の九時から次の日の明け方までの仕事で少々きつたが、千九百五十円と当時としては割に金額も高く、生活も逼迫していたので兎に角その仕事に潜り込んだ。

そのバイト先で知り合いになつたのが、忘れもしないこの小冊子の編集長である関田氏と同人の小泉氏である。三人とも無類の映画好きだったので直ぐに親しくなり、あれこれ映画の話ばかりをしたのだが、その時から何十年も経て仕舞つた今、私が現在でも強烈に思い出すのは、始めて会つた時の彼らの風体である。関田氏は「下町の日比谷高校」(日比谷高校は昔の府立一中で、東京随一の旧制中学の超名門校)といわれた、戦前の府立三中の流れを汲む彼の名門両国高校の出身であるのだが、その生粋の江戸っ子である筈の彼が、私服から御仕着せの粗雑な作業着に着替える時、私はしばし嘖然として関田氏をずっと見詰めていた。

何と何と、彼はスラックスの下に、正に正に縮みのステテコ(!!)をはいていたのである。嘖然、呆然、凝然。

凝然。

私は前記した様に静岡のど田舎の生まれで高校までずっとそのムラ社会で育つたのだが、そんなど田舎の青年の認識でもステテコなどはいいさんかおっさんしかはなく、若者はそんな恰好の悪い一物ははく可きではないと思つていたので。関田氏は私を始めとするバイト連中の好奇の視線もものは、何の動ずる素振りも見せず悠々として着替えをし、それが終ると平然として作業手順や雑談の輪に加わるのだ。

私は何のきおいてもてらいい見せず自然体で振舞う氏に、一方ならぬ好感を覚えた。「東京の田舎者」は、あの名門両国高校出のステイボーイであつた。尤も、ステテコは現今、新たに生れ変つて斬新化され、外国人観光客や若い女の子に大人気らしいのだが……。ではあるのだが、私のイメージは、矢張り、赤塚不二夫の例の漫画のステテコ親父のままである。——井鉢や浮いた浮いたステテコしやんしやん——、である。

一方の小泉氏も東京も東京、華の都心のしかもその中心の直中で生まれ、母上が映画好きだった為なのか物心が付き始めから映画を

見続け、知り合った頃は私などより数倍多くの作品を見ており、私が未見であった昔の古い名画を実に詳しく知っていた。

当時の彼の風貌はと見て取れば、これがまたまた凄まじい風体なり。長髪はおどろに逆巻いて大きく盛り上り、貌はと見れば飽く迄青黒い濃い髭が、顎下一面にこれ見よがしに蓄えられている。想像するに、恐らく、彼が限りなく敬愛しているボブ・ディランを真似たのであろう。譬えは誠に悪いが、正に、『風に吹かれて』（ボブ・ディランの名曲です）、どこぞの山家から今出て来た様な有様であった。彼は無類のバイク好きでちやきちやきの江戸っ子であるのだが、その風貌はと見て取れば、〃山家の猿〃といわざるを得なかった。丹波篠山、山家の猿が……と唄われた篠山節その物であった。そこに生活破綻者の私。我々三人は寄ると触ると見て来た映画や昔の映画の事を話した。

特に東映任侠映画、いやいやその頃はそんな改まった物言いではなく、唯単にヤクザ映画といったが、兎も角、我々三人は無我夢中で鶴田浩二、高倉健、藤純子、菅原文太、若山富三郎、松方弘樹

らの素晴らしさを、いや彼ら主演級ばかりでなく、彼らをこれでもかこれでもかと憎々し気に甚振る大ワル、河津清三郎、安部徹、金子信雄、天津敏、諸角啓二郎、内田朝雄などなどの敵役にも、あそこが善いとかここが堪らないとかあの殺され方が凄いと興奮の体で語り合った。実際、仕事に行っているのか、映画の話（特にヤクザ映画）をしに行くのか、定かには判らない程であった。後は、仕事が終わった明け方の待機室での缶ビールが、最大にして最高の楽しみ。そこは窓とてない、地下三階の小穢い穴蔵ではあったが……。

紛れもなく我々は「全共闘世代」である。我々の世代の最大のアイデンティティーは、恐らく、「叛逆」であろう。総ての権威・権力に叛逆し、自分達より上の戦前的価値を色濃く引き摺っている世代を徹頭徹尾糾弾し抜き、以て彼らの欺瞞性を断乎として完全に粉碎する。多かれ少なかれ、当時、我々の世代が共通に抱いた信念は、その辺りに収斂するであろう。今になって考えると気恥ずかしい限りではあるのだが、小生意気な若

さとは、どんな時代でもその様な相を見せて激しく炸裂するのだ。恐らく、いや確実に、我々世代が口を極めて糾弾した世代だって、彼らの上の世代に対しては、我々と同じ様な事を繰り返していた筈である。

我々バイト連中の多くは、職場に於ては正に傍若無人なる振る舞いを見せて獅子吼し、当るを幸い何でも彼でも反抗していた。アルバイトの組合（主に新聞社や情報産業などのバイトが主力）は、全共闘世代の影響を諸に受けて忽ち先鋭化し、丸で過激派セクトの様な有様を呈した。一風変っていたのは関田氏や小泉氏や私の所属していた分会で、何せ「ヤクザ映画命」(!?)の我々が組合員になっていたのであるから、組合集会や執行委員会や闘争方針を決める会議では、須くヤクザ映画の名（迷）ゼリフが飛び交い、やれ「仁義を切る」の「落し前を付ける」の「代紋を付ける」二代紋とはゼッケンや腕章の事）の「殴り込みに行け」（団体交渉に行く事）のと、内実は兎も角、丸でどこぞのヤクザ一家のお兄いさんが話している感があった。我々三人の影響か、他のバイト連中にも、ヤクザ映画に魅了

される者が続出していったのだ。

事程左様に我々の分会は「極道分会」その物となり、他の分会からは散々「義理人情路線」と揶揄された。そんな揶揄も一理はあった。分会長を影では「おやつさん」と呼んでいたのだから、推して知る可しである。更には分会員をお互いに「兄弟」と呼んだ。因みに私は関田氏や小泉氏より僅かばかり早くバイトに就いたので、歴とした兄貴分(!?)である。所がこの舎弟どもは如何な兄貴分を敬う所か、命令ひとつろくすつば聞きもしないし、剩え、ちよつと油断していると忽ち口答えをする始末。そこで一言。またまた、ヤクザ映画の名ゼリフを借りる。「あやつら、組の行儀ちゆうもんをどない思ってるんじやあー」因みに、これは松方弘樹兄いの凄みのある絶叫です。そんな何とも奇天烈な擬似共同体も、何時かは終焉を迎えざるを得ない。そう、丸で類多多くの東映任侠映画の様に……。具体的に書けば会社側の合理化の為だ。我々兄弟達は体を張って職場を占拠して座り込みを敢行したのだが、事、鶴田浩二や高倉健の様にはなれず、呆気なく屈強なる機動隊員に排除されて仕舞った。何とも弱い極道

分会であった。

一別以来会う事のない多くの兄弟達よ、我々の「盃」は今でもそのままであるのか？ 私はそうでありたいと、心から願っているのだが……。

縷々として書いて来た通り、若

き日、東映ヤクザ映画を狂った様に見続けた。それはこの上なく幸せな日々だった。私を狂わせたあのヤクザ映画群が、比較的安価で再び見る事が出来るのだ。従来から東映の子会社の東映ビデオからは、数多くの任侠映画が発売されているのだが、如何せんそれらは高過ぎるのだ。それに比べてデアゴスティーニ社のそれは、千八百五十円と安いのだ。今の所、果して何巻発売されるのかは判らないのだが、貧乏人には安いのが兎にも角にも嬉しい。そんな訳で勇んで創刊号から求めた。

例の海中の岩に波が打ち砕けるシーンに東映の三角マークが映し出されると、何時も心がときめく。あの東映の象徴である三角マークの事を、東映専属俳優であった山城新吾は、テレビのバラエティー番組の中で、「義理欠く、恥欠く、

人情欠くの三欠くマーク」と、愛情を込めておちよくったが、正にその言や言い得て妙と苦笑した。創刊号は記した様に『網走番外地』の第一作目。これは白黒作品である。製作時には果してヒットするかどうか判らず、因って製作費を押える為にもモノクロ作品となつたのであろう。

そこでこの愚論の冒頭の文章。

衝撃が走った。私は少し焦った。いや、正直に記せば、少しではなかった。こんな筈では……。焦燥感を抱きつつ第二作目を買ひ、家に戻るのもどかしく、直ちにDVDをセットした。『緋牡丹博徒』第一作。前作と同様、また同類の衝撃が走った。いや、これまで正直に記せば、衝撃の度合は更に大きかった。何とした事であろうか。当惑は私を噴み、惑乱は心を掻き乱して行く。再び、こんな筈では――。懲りもせず三作目も買った。否、断乎として懲りては困るのだ。ここで『昭和残侠伝』の中で、花田秀次郎（高倉健）に常として連帯する風間重吉（池部良）の名ゼリフを借り、我が心胸を吐露する事とする。「それじゃあ、仁義になりやせんっ」そう、「仁義になら

ない」のだ。そう、「意地のしがらみに生きねばならない」のだ。そう、「男が立たない」のだ。（卑猥な事をくれぐれも考えないで頂きたい。念の為……）三作目はその『昭和残侠伝』第一作。（この作品での高倉健や池部良の役名は、花田秀次郎や風間重吉ではない。その名前が定着するのは、少し後の作品からである）

矢張り、駄目であった。三度目の衝撃が走った。狼狽が全身を駆け巡った。うろたえは私を捕えてはいたが、やがて、ゆっくりとではあったが、落着きを取り戻した。私はようようの事で「諦め」に達したのだ。諦観。勿論、それ迄の滑稽なるあたふた振りには恥ずかしい限りだし、諦めるといつてもそう簡単に諦めた訳ではなく、今でも未練たらたらでいるのであるが、矢張りここは一番思い切らなければならぬかと、何とはなしに考え始めている。正直、今でも未練の中で、腕き苦悩してはいるのだが……。

アイデンティティーの問題なのである。長々と書いて来た様に、私の青春は東映ヤクザ映画とともにあった。いや、ヤクザ映画しかなかった。東映任侠映画は正に絶

対的であり、そのみを見る事に因って、総ての問題の解決への道が開けた。

幻想――。恐らく、そうであったであろう。がしかし、あの若き日には、莞爾としてその様に思つたのも偽らざる事実であった。繰り返し書く事になるが、「東映任侠映画」は「私に取って絶対」であったのだ。

東京に在住していた頃は、日常の中にヤクザ映画は確として存在していたが、故郷の田舎街に帰ってからは、殊に大病を患ってからはヤクザ映画を殆ど見なくなつて仕舞った。いや、ヤクザ映画ばかりか、映画一般を余り見なくなつた。ではあるが、若き日の私が狂った様に見続けた東映任侠映画は、我が心の奥深い所に常として生きていて、己が苦境の土壇場に至つた時、「任侠映画の思想」は自分の征く可き指針をはっきりと明示してくれた。尤も、私は鶴田浩二や高倉健や藤純子程には強くはないので、多くは、彼らが明示してくれた征く可き道を途中から裏切り、すたこらさつさと遁走し始める事もしばしばあったのだが……。私は実に弱いのだ。それは兎も角、私は彼らが身を以て体現して

くれた「高邁なる義の思想」を、「人の道としての仁義」を、適わぬ迄も今迄ずっと我が心の糧として来た。そのヤクザ映画命のこの私に、何たる体たらく。勇んで見た発売されたDVDに、若き日の狂気の熱情は肅として噴き出さず、皆目、熱狂の片鱗すらも突き上げてこない。私は仏教で謂う所の「失念」らしき物を感じた。心を散乱させる煩悩。

創刊号、二号目、三号目、更には次号も更に更に次の次の号も……。見続けても見続けても、全く結果は同じ事であった。今の私は如何して仕舞ったのだ？ 焦って見続ける間も、私は何とか熱情の取っ掛かりでも掴めればと、様々な方策を、いや滑稽極まる所行を為出かした。苦笑するしかない、その涙ぐましい努力。

過去に買ったヤクザ映画に就いて書かれた書籍類を、乱雑極まる凄まじい散らかしの置き場所から苦心惨憺して捜し出し、前後の見境もなく手当たり次第に読み返した。今でも覚えていた名著を捜し出せなかった無念さあり、買ったのを当の昔に忘れていた本が出て来て驚いたり、誰かに借りてそのまま手元に残って仕舞った本ありで、

兎も角、それらを走り読みの走り読みぐらいの粗雑さで、一応それなりに読み返した。

無駄であった。全くの無駄。そんな姑息な事をして「あの狂おしい熱情」は、再び戻り来ない。内心そうなるであらう事は薄々判っていた。ただ、それを自認するのが堪らなく嫌だっただけだ。己の熱情は決して、再び戻り来ない。慙愧の内にそれを認める。

往生際の悪い私は次なる所業も行った。殆ど朝から夜中まで一日中、鶴田浩二、高倉健、藤純子の歌を聞き捲ったのである。高倉は余り歌を唄う事に自信がなく、発売されているのは『番外地』と『残俠伝』シリーズの主題歌ぐらいであり、同じく藤も『緋牡丹博徒』シリーズの主題歌しかないのだが、殊、鶴田は全く違っている。彼の師匠である高田浩吉も歌が上手く高田主演の映画の一部（股旅物や道中物が多い）は、ストーリーと余り関係ない所で突如として歌が流れるのだが、それらの歌はヒットしたし、その御蔭を以てか映画自体もヒットした。彼の弟子（鶴田は戦前と戦後の一時期、『高田浩吉劇団』に入っていた）である鶴田も、師匠の薫陶宜しきを得て、

若い内から次々と大ヒットを飛ばし、歌手としても多くのファンを持つ身である。鶴田は多くのレコード、テープ、CD類を出しており、私も鶴田の歌は彼の映画と同様大好きなので、数多くのCDを持つっている。それらを片っ端から聞き捲ったのである。長い長い間に渡って三人のCDを聞いたが、矢張り矢張り、無駄であった。

ヤクザ映画に関する書籍類を読み返した時と同様、あの「狂おしい熱情」は如何な戻っては来やしない。聞く前から密かにそして確実な事として、内心、それは判ってはいた。それが白日の元に曝され、先の試みと同様、己自身そう認識させられる事が堪らなく嫌になった。他にも笑わざるを得ない珍妙なる試みを多々なしたのだが、もう書かない。

賢明なる読者諸兄には、本の件と歌の件の二件を記すだけで、もうお判りであろう。私には東映任侠映画を再び見直しても、あの若き日私を捕えた狂気の熱情の影すら蘇えらなかつたのである――。悲しい事である。寂しい事である。辛い事である。が、これは眼の前に厳然と突き付けられた事実であり、それを幾ら否定したくとも、

事実の方から確として己に襲い掛かって来るのだ。否が応でもそれを認めるしかない。

懊悩、そして懊悩、そしてそして懊悩。その懊悩の果ての果て、突然としてある小さな小さな光明らしき物が、真つ暗闇（うんっ、鶴田浩二の『傷だらけの人生』、か!?）の中に仄見えた。

果して、こんな惑乱の渦中に投げ込まれたら、任侠映画の中の鶴田浩二や高倉健ならどうするだろうか？ 胸に迫り来る万感の思いを緊として振り捨て、決意の形相物凄く、白鞘の目釘に湿りをくれるか、或いはドスの鯉口の抜き具合をゆつくりと確かめるかするであらう。生と死が無惨に交錯する修羅場を、日常の事として数多く潜り抜けて来た「筋者」は、当然、こんな時どんな事をなす可きかを十全に知り尽しており、動揺の色さえ毛筋も見せず、手慣れた手付きで「己の死への道行」への準備をする。

毗を決したその双眸には、在り在りと決意の焔が燃え上り、和服姿のその全身からは、テロルを決然として観念した「崇高なる殺意」が怪しい色気を見せて滾り立っている。その画面に常として流れる

音楽は、彼の（または彼女）決意を丸で煽るかの様に、或いは祝福するかの様に、或いは悲しむかの様に、或いは愛するかの様に、或いは慈しむかの様に、殊更に低く低く響いている。「征くのだ鶴田」、「征くのだ健」、「征くのだ純子」と、彌が上にも指咻しまくる。ヤクザ映画には必ずの様に、こんなシーンがある。主人公の「死を賭した営為」への餞として。常として響くあの通奏低音は、言わば次に来る大殺戮への「讃歌」の序曲である。そして、観客全員が待望していたカタストロフ——。私はやつとやつと理解らしき物に達した。私は縦横無尽に暴れ捲って大殺戮をする主人公の姿を見ており、そ

ひと味違うウエスタン

「悪党に肅清を」

ダーク・ウエスタンという趣だ。ポスターには西部劇ノワールとあった。妻子を殺された主人公が恐怖の支配する町でボスと戦うというありふれたスジの復讐劇なのだが、暗い雰囲気は漂っていていい。「夜の駅馬車」（初めて見た）が暮れなずむ荒野を駆け抜けるカットもきれいだ（暗転を予感させる）。カメラがいい（ジャン・スクロツ

の前の凄まじい迄の苦悩に色取られた「諦観」を見てはいなかったのだ。彼らは総てを諦めて、テロルへの道行きを決断したのだ。私はその「苦悩に色取られた諦観」こそを、見る可きであったのだ。東映任侠映画の要は、製作側の意図を正に裏切って、そこにこそあったのだ。生死を含めたあらゆる一切を総て投げ出した彼らは、最早、あれこれなどの思案は全くなく、諦観の内に握り締めた白鞘か日本刀或いは懐のドスだけが、彼らの運命の答を知っているだけだ。

断ち難き諸々を凄まじき苦悩の内に敢然として諦め、只管、死するであろう道行きへ急ぐ彼らの、何たる美しさ何たる荘厳さ何たる

サー、DEF)。原題は「THE SALVATION(救世主)」。

ダークだがマカロニウエスタンと違うのは、残酷味を薄めているところだ。言い換えれば観客の想像力を喚起しているということだ。

善人が殺される場面は、ボスの残忍性を示すワンシーン以外は極力直接描写を省略、悪漢どもの死さえ殺人シーンをいくつかは省いている。人物にまつわるドラマを短い台詞で端的に表現しているのも

哀切さ。考えれば考える程、その「馬鹿馬鹿しさ」は際立つ。が、その馬鹿馬鹿しさの何たる崇高さよ——。私は彼らから、その「馬鹿馬鹿しい崇高さ」こそを学んだ筈であった。鶴田浩二よ、高倉健よ、菅原文太よ、藤純子よ、池部良よ、そして彼らに無惨に殺戮された数多くの悪役達よ、私はあなた達から「高邁なる思想」を学ばせて貰った。譬え今や若き日の熱狂は戻らずとも、私はそれを「諦観」の中で正に「諦める」。それは『シネマ気球』に再三書いて来た様に、「私に映画はもうない」と全く同義であるかも知れない。そしてそれは、老いてじじいになった事でもあるが、私は今でも「東映任侠映画」

見るもののイメージを膨らませる。ジョン（マッツ・ミケルセン）は故国デンマークでドイツと戦った経験がある（負けた。人殺しの技は身に付けている）、ボスはインディアンを散々殺して精神に異常をきたしている、ボスの弟は刑務所帰り、その情婦「姫」（エヴァ・グリーン）はインディアンに捕らわれて舌を切られた——。語りすぎないのがいいのかもしれない。ボスに夫を殺された男の妻が、

に仁義を尽そうと思う。譬えあの熱情は沸き上がらずとも、譬え興奮の坩堝と化さずとも、譬え熱き涙を流さずとも、じじいの私はこのDVD集を毎号買い続けるだろう。それが私の彼らへの「仁義」である。彼らが指し示してくれた「偉大な思想」は、今でも赫灼として私の中で輝いているのだ。ええと、次の号の発売日は？ あったあ、七月七日かあー、おっ『緋牡丹博徒 お命戴きます』かあー。絶対に買うぞ、加藤泰さん、藤純子さん。

——了——

逃げてきたジョンを匿って食事を与えたり、登場人物（卑怯な町長、ボスのいいなりの保安官、祖母を殺された雑貨屋の若者）がうまく絡んでいる。決戦の日、ジョンが床下を這っていくシーン、銃弾が床下を突き抜ける度に目の光が床下の地面に到達する場面などうまい。監督・共同脚本Ⅱクリスチャン・レヴィング。共同脚本Ⅱアナス・トマス・イエセン。デンマーク、イギリス、南アフリカ共同製作。(T)

女もつらいよ

里中智子

『駆け込み女と駆け出し男』

江戸時代、妻はひどい扱いを受けても夫が同意しない限り離婚が許されなかった。妻は夫が離婚を許してくれる日までひたすら我慢に我慢を重ね待つしかなかった。そんなやつてらんね〜時代、幕府公認の縁切り寺「東慶寺」は助けを求める女性たちに救いの手を差し伸べていた。ただし、縁切り寺に駆け込むまでには、夫側に悟られ阻止されたり、旅の途中で悪い奴らに襲われたり命がけだったようだ。寺の門前で追っ手に迫られても女性が身につけている物を門

の中に投げ込めれば駆け込みは成就したとみなされたそうだ。実際そんな緊迫した場面は頻繁にはなかったと思うが、駆け込みを見届ける側にいたら、女性が駆け込むまでは手助けできないのだからなんとか成功するようハラハラして見守るしかなかっただろう。駆け込んだ女性たちは直ぐには寺に入ってもらえず、御用宿で調停役を務める宿の主人から事情を聞き取られる。そして当事者である夫が呼び出され、まずは示談を勧め、夫に受け入れられなかったら妻は寺に入ることになる。寺で二年過ごした後、晴れて離婚が成立することになる。ところで寺に入る女性たちは平等に扱われるのかと思っていたら持参金によつて格付けが行われ、たくさん持っていた人は心静かに暮らせるが、持たない人は下女のように働かなくてはならない。苦境に立たされ逃げ込んできた女性であることに変わりが無いのに、持参金で待遇の違いがこうもはっきりするとは、いつの時代もやはり金かあ〜と思うと可笑しくもあり悲しくもあり。

この作品に出てくる女性たちは、様々な事情を抱えていて今とまったく変わらない。江戸時代という女性にとつて制約の多い世の中で多様な個はひとまず心の中に秘め、懸命に日々を生きていたのではなにかと思うとただ弱いだけの存在ではなく凛として肝が据わった別の一面も見えてくるようだった。

『はじまりは5つ星ホテルから』

転じて現代の女性は、もちろん国によつてはまだまだ女性の地位は低いままだが、ほぼ自由に生きられる時代になってきたのではないかと思う。自由を手に入れた女性たちは、どう生きていくのかを自分で選択しなくてはならない。

イレネは、ホテルを格付けするたため覆面調査員として世界各国の高級ホテルを巡る多忙な日々をおくっている。いったん仕事を離れば一人暮らしの寂しさもあるが、妹家族やなんでも話せる男友達と居ることでまぎらわされている。そんな充実した毎日を過ごすうちにこの生活が変わることへの漠然とした恐れが芽生えていたのかもしれない。でも現実には、変わらないものなんて何一つなくて、自分を取り巻く周りの状況も不変なわけがないし、もちろん自分だって歳を重ねているのだからいつま

でも若いわけではない。今が良ければ良いほど無理だとわかっていても変化を受け入れられず現状にしがみつきたくなってしまうものかもしれない。妹にお一人様の老後を心配されても、不安で押しつぶされそうになるから真剣に考えなければならぬとわかっていても心の隅に押しやってまだ先のことだとかまかしてしまう。でも、今までのものの見方・考え方を一変させ、急に不安でがんにがらめになり混乱を招き取り乱すような転機は訪れるもので、助けを求めたくても今後をどうするかは結局誰でもない自分が選択するしかないのである。

江戸時代よりも自由を手に入れる挑戦できる世界になった分、何をどう選択するかは他人任せではなく個人の裁量にゆだねられる。いろいろ失敗して苦い思いを味わいながら悪戦苦闘しているうちに気がつけばおばちゃん!! 色々なかに生きる女なんて夢のまた夢でもあちこちぶつかりながら懸命に生きている。イレネもきつと一息ついて吹っ切れた気持ちでこの日々には復帰してくるのだと思う。

—— 読者から ——

警備員室午前四時

〈第2回〉

農律 捨丸

前略 関田監督様。また一年経ちました。お元氣のことと思います。ただ、よもやということですが、この間、私に声を掛けられることなく製作をすすめている作品などありませんでしょうね。(いや、失礼を…)では、またしばしの御無沙汰のお詫びとお礼のつもりで、近況報告をさせて頂きます。

私の就いている警備の仕事は、前日の午後四時から翌日の午前八時三十分までの拘束です。休憩もかなり多いですが、仮眠が午後十一時三十分から午前四時まで。この午前四時というのがなかなか泣かせる時刻なのです。現在の季節

(六月)は一年のうちでも最高のときで、素晴らしい夜明けの中を巡回しますが、冬期ではまだ真夜中。何を好きこのんでと思いながらも足元をひたすら見つめて歩くことになりました。転びますからね。

〈報告 一〉それで、大変なのかという大変ですし、ラクかというラクなのです。学生時代からの友・F君を警備員の世界に引つ張り込んだのもそんなことからでした。TV局で立派に仕事をし終えた彼、「あの番組」もつくっていました。おまけに病いまで引き受けていました。健康法とを考えてやたらどうかと誘いました。彼もえらい、それまでの蓄積をきっぱり捨てて、いまや立派な警備員です。しかも、交通費自分持ちで都内から通勤しています。世の中、陰に回っている人間のほうに人物が多いのは、いつも大きな希望です。映画・芸能なんかでも、表に出ている役者がつまらんのは……という八ツ当たりでした。(監督、私の出番まだですかね)。

横。十メートルほどの斜面に鉄骨でつくられた木の階段があります。この鉄骨のジャングルの中で遺体が発見されました。その後の法医学的判定の結果は知らされていないままながら、「あの時にはなかった」といいたい。つまり私は「見ていない」のです！ 正午すぎに散歩人が「□をつっている人がいます」と、公園管理事務所へ駆け込んで来たのでした。警備員なら、自分で発見してやりたかったと思っても、見ていなかった、見えていなかった、いや、まだ起きていなかった事件なのでした。ただ、その始末をしたのは、私の息子の職場の同僚たちでした。少しばかり神妙な気持ちにさせてくれます。

〈報告 三〉クリスマスの日も上番(じょうばん)と読みます。当番に上がること)でした。ところが、この日のプレゼントは、とんでもないものだった。酒の匂いブンブンの相棒です。二度目の組合せなのに、(初回も酒くさかったか?)まるで酔っ払ったまま上番して来たのです。こいつは許せなかった。直ぐに問い詰め、シラを切る本人の前で会社へ連絡。要員の交代を求めました。段々と開き直る態度を見ると、常習者だったのです。

さいごは「どうしようか?」とぬかす。「なめトンカーツ、自分で決める」とどなり捨てました。急行して来る会社の交代員が到着する直前、この者は姿を消して行きました。私は、自分の最高・最良の友人を紹介した職場のつもりなのに、よりによってこうした愚か者と組まされるのか。この男・Sがクビになってから、補充の人が現れるまで五ヶ月もかかりました。しかしその間、他のオールドボーイズたちが大頑張りをして、人員不足を補い、なんとこの春からは一晩に千五百円のベースアップまで手にしています。いまだき、ひどい話なのかいい話なのかわかりませんが、極めてちっちゃな職場で起きたガンバリズムの勝利報告でもあるのでした。

〈報告 四〉さて、やはり一つは、目下のところ副業の位置づけになってしまった、Y市青少年施設でのお話。二月に起きた、隣のK市の中一少年殺害事件は大きな波紋を呼んでいます。こちらでも同様なことがその前日に起きたのです。ふたを開ければささいなこととで、中二の男子が施設に隣接する公衆便所で数名のよそ者グループに暴行され、意識もはっきりと

しないまま救急搬送されたのでした。警察もK市の事件との関連を追い、とうとう施設は、ひと月以上も半分休館の状態になってしまいました。暴力排除の名の下に、青少年を入れることの出来ない青少年施設。きっかけはともかく、それら暴力行為につながる素地というべき事態は、日常的に職員やパートタイマーたちが対応しているレベルでも想定出来たものでした。自分も無力・無気力であったことになりませんが、すんなりとは世の中に受け入れられない子ども

たちが集まって来るのがわかってこの「居場所」に、事に当たり腹のすわった考え方が存在していないことが露呈してしまいました。もはや手に負えなくなっている日常を放置して、事件となつてから対応策を急ごしらえする典型的な「行政型」マネジメント。(Y市の施設です)四月に再開されたときには、警備員常駐というものになっていました。(ちなみに同業他社の警備です。)

末になつて、大ケガをした少年本人が「きのう、退院した」と挨拶に来たことです。四キロ太つて、少し血色もよくなつて。なぜか四十年以上も前に見た内田吐夢「人生劇場」で鶴田浩二の飛車角が、北関東あたりの刑務所から出てくる冒頭のシーン。関田監督、覚えていてでしょう！ ケツを蹴飛ばされて、転がるようにして出てくるやつですよ。「もう来るんじやねえぞ」って。いい加減な思い出に結びつけて恐縮ですが、あれが学生時代の映画体験のすべてであつ

たわい。それで、この少年が来たことと、鶴田の記憶とが結びついてしまいました。すみません。関田監督。人生と映画のフィルムロールは、いつ回り出すのかわからないところが共通しています。私を警備員にしてくれた私の息子もつい最近、山の男になるといつて、南九州の林業地へ出発して行きましたよ。あれー、もう四時ですか。起きますっ。

最近気になる シネコンのスクリーン

シネコンで映画を見ることが多いのだが、ひとつ気になることがある。スクリーンのことだ。スクリーンはシネマスコープサイズ(以下、シネスコサイズ)でつくられており、シネスコサイズの映画を上映するときは全然問題はないのだが(写真①)、ビスタサイズの映画を上映するときにそのまま映写するので両端が薄暗い状態のまま見なければならないのだ(写真②)。初めて見たとき途中でシネスコサイズになるのかなと思つて

見ていたのだが、そうではない。そのままなのだ。かつては、ビスタサイズの映画を上映する場合、両サイドにある暗幕がスクリーンサイズに合わせて真ん中に少し閉じるので、両サイドが薄暗く見えるなどということがなかった。それが普通だったのだが、いつごろか(最近)、この状態が常態化している。暗幕をそのままにしておけば、映画によって広げたり閉じたりする手間が省けるから便利だとの考えでやっているのしか思えないのだが、見にくいし薄暗い部分が気になる。多少手間暇かけて見やすい状態をつくってほしい。

また、ほかのシネコンでは、スクリーンが最初からビスタサイズでつくられているところがある(シネコンだから、シネスコサイズの会場もあるのだが)。これだとビスタサイズの映画は問題ないのだが、シネスコサイズの映画が上映されるときはどうなるかというと、こんどは天地が薄暗くなる。かつての映画館では上下の暗幕をスクリーンサイズに合わせて天地を縮めて薄暗いところをなくして上映したものだ。その方がきちんと上下左右を黒い幕でカバーしているから見やすいのだ。なんで、いつの間にかこんな手抜きをするよ

うになつてしまったのだろう。シネコン各社に再考を促したい。お願いします、スクリーンサイズに合わせて暗幕を調節してください。(せ)



イラスト & エッセイ

私のラジオデイズ

中田好美

二人と会話をしたことだった。

当時ダンスを習っていた私は、グループオーディションで使用する曲は何かと悩み、番組へ相談のハガキを送ったのであった。その後、なんとラジオ局から電話があり、コーナへ出演することになったのだ。

興奮、緊張、喜びで胸が一杯になり、メンバーと話している間、手の震えが止まらなかった。

最後に二人へ問いかけた。

「KENさん、YUKI NARIさんにとつて、ダンスの極意とはなんですか？」するとKENは、

「楽しめればいいんじゃない？」

できない技とか、できない音の取り方とかを見つけた時の、俺ってこんなに成長したんだというのが、やめられないところかな。技とかができた瞬間、嬉しいじゃん？ ステップとか踏めた時、嬉しいでしょ？ それが楽しむことも入ってて、ダンスの極意なんじゃないかな」

この言葉が胸にストンと落ちたのは、大好きなKENの言葉というのもあったが、何よりダンスを全力で楽しんでいる姿を知っていたからこそ、より心に響いたのだと思う。KENが真剣に伝えてく

れたこの言葉は、今も心の支えとなり、ダンスだけでなく全ての物事に言えることだと改めて思うのであった。

それからしばらくラジオから離れた生活を送っていたが、スマートフォンで購入をきっかけに、また聴くようになった。「radio (ラジオ)」というアプリを使い、お気に入りの放送を曜日や時間帯によつて選局しながら楽しんでる。

そんな私の一番のお気に入りには、bayfm(ベイエフエム)で放送されている「The BAY☆LINE」というネタ満載の番組だ。

井森美幸と森久保祥太郎がDJを務め、毎週金曜日の16時から18時38分まで放送している。

私はこの番組のレギュラーコーナーである「イモRAP」にはまってしまった。日常で起こるネタやエピソードなど、歌詞を自由に書いて送り、採用されると井森さんが即興でRAPを披露してくれる。井森さんの独特なリズム感と、舌足らずなところが相まって、お腹を抱えて笑ってしまうのだ。

最初は面白い番組だなと聴いているだけだったが、聴いている内に参加したくなり、イモRAP

Pへ初投稿。

「イモRAP!」のコーナタイトルとともに心拍数が上がり、手に汗握る思いで聴いていた。ラジオネーム……の度に期待が高まっていた次の瞬間、
「ラジオネーム、ペロクマさんからいただいた、イモRAP!」(きたあ!!)

その時採用された歌詞は、

母とドライブ出かけたよ

そしたら道に迷ったよ

こっちでしよ

そっちじゃないよ

あっちだよ

それどっちだよ

地図を回してぐるぐる

行きたい先もぐるぐる

二人の頭はぐるぐる

ぐるぐるーのぼっ(以下割愛)

という、道に迷った時のエピソードを送ったのであった。この歌詞が井森さんの手に掛かると面白くて、本当に笑ってしまうのだ。「ぼっ」の部分が井森さんのツボだったらしく、歌う度に笑いをこらえていた。

最後に送られてきたRAPの中から、キングオブイモRAPとい

初めてラジオに夢中になったのは、高校生の頃だった。当時DAMPの大ファンで、「Be@t B@by DAPUMP ON THE RADIO sound break show」というラジオ番組を毎週録音して聴いていた。ラジオにハガキを投稿したのもこの時が初めてだった。

番組内で直筆サイン入りのプレゼントが当選したり、投稿したネタなどを読まれたりした。そんな中でも一番の思い出は、「電リクオンエアバトル」というリスナーと電話を繋ぐコーナーで、メンバー



う大賞を決める。大賞に選ばれると、井森さんと森久保さんの直筆サイン入りステッカーがもらえるという。

そして発表の時、「可愛らしいの、いきましようか？」という井森さんの一言で、何とキングオブイモRAPに選ばれたのである。この瞬間、ネタが採用される喜びにはまっていた。

その後もイモRAPに投稿を続け、3回キングオブイモRAPに選ばれた。最初は自己満足でしかなかったが、投稿したRAPを笑いをこらえて歌ってくれる井森さんや、そのそばで笑う森久保さんの声、ツイッターでネタに反応してくれるリスナーを見て、何だかいいなあ、としみじみ感じるのであった。笑いの瞬間をラジオで共有できる喜びは、一度味わうとやみつきになってしまう。こうなると、どうにもとまらない。採用されない週が続いても、めげずに投稿を続けている。

笑いは人の薬というが、本当にその通りだなと思う。一日の終わりに録音した井森さんのRAPを聴いて眠ると、笑いで力が抜け、気持ちよく眠りに就ける。ラジオで顔は見えないけれど、DJの声

を聴いていると、その人の持つ雰囲気や癖などが分かり、テレビよりも身近で本音に近い素顔が覗ける気がした。ラジオ特有の、その温かな魅力に引き込まれてしまった。

ラジオが好きになり、放送する側の人達はどうのようにしてリスナーに番組を届けているのだろうと思ひ、ラジオがテーマとなっている映画を観る事にした。

『グッドモーニング、ベトナム』

ベトナム戦争の最中、実在したDJをモデルに描いた作品である。DJエイドリアン（ロビン・ウィリアムズ）が、トラックに乗った兵士達と会話をするシーンが印象的だった。

兵士一人一人に名前を聞き、名前から瞬時にトークを膨らませユーモアで返す。下ネタも混じるが、これから戦地へと赴く彼らを笑顔にして見送るシーンは何とも切ない。笑顔で見送りながらも、憂いを含んだエイドリアンの目元が忘れられない。

その後、兵士達は戦場で戦い、尊い命が失われる。戦場シーンで流れるルイ・アームストロングの『この素晴らしき世界』は、惨状をより色濃く映し出し、胸に突き刺

さった。元々この名曲は、作詞作曲をしたボブ・シールがベトナム戦争に嘆き、世界平和を夢見て作られたという。映画を観た後にそのことを知り、作品と曲の深いかわり合いを感じた。世界はこんなにも素晴らしいのに、この世界で起きていることはどれだけ残酷か。

尊い命の奪い合い、悲しみの連鎖は終わることなく続いてしまう。どうすることもできない現状と、彼にしかできなかったこと。戦争という渦の中、決して交わることのない想いに、胸が苦しくなった。

『ラジオ・デイズ』

第二次世界大戦直後のニューヨークを舞台に、ラジオを通して描かれる大家族の温かな日常。

ある日ラジオから、少女が穴に落ちてしまい、懸命な救助活動が行われているというニュースが流れる。やんちゃ盛りのジョー少年(セス・グリーン)は父親(マイケル・タッカー)に叱られ、お尻を叩かれていたのだが、このニュースが流れ始めると叩くのをやめ、父親が子供をぎゅっと抱きしめる。このシーンがとても印象的で父親の深い愛情を感じた。

ジョー少年が語る、曲と共に思

い起こされる家族のエピソードなどにもとても共感した。思い出と曲が結びつく、より鮮明な記憶として心に残る。

家族が寄り添い、ラジオで時間を共有する。現代でもそのような家庭があつたら素敵だなと思う、ほのぼのとした作品だった。

『僕はラジオ』

知的障害を抱えた青年とアメリカンフットボール部のコーチとの交流を実話に基づいて描いた作品である。

障害を抱えたジェームス(キューバ・グッディング・ジュニア)が、ハロルド(エド・ハリス)と出会い、周囲の人々から愛されてゆく様子が温かくなった。

ジェームスがハロルドの襟を直し、二人で笑い合うシーンは、目には見えない心の繋がりを表現しているようでとても微笑ましかった。

他人の人生と向き合い、心を通わせ、地域と一体となつてジェームスを支える。これはなかなかできないことだと、この作品を観ながら感じてしまった。

最初の一声ほど勇気のいるものはない。席を譲るにしても、ベビーカーを運ぶにしても、まだ人生

で数える程しか手助けをしたことがない。でもそのきっかけに居合わせた際には、勇気を持って声を掛けたい、そう思わせるような優しさに溢れた作品であつた。

『バイレーツ・ロック』

海賊放送を行うDJ達と政府の対立を描いた作品。

とにかく登場するキャラクターの個性が強くて面白い。8人のDJそれぞれが、得意分野を活かしながら番組を担当する。自由気ままに船内で過ごし、そこに恋愛や親子模様も描かれる。

オープニングはDJザ・カウント(フィリップ・シーモア・ホフマン)の選曲で、キンクス『オール・オブ・ザ・ナイト』が流れる。ノリノリのDJとウキウキなリスナーに観ているこちらも盛り上がる。ザ・フーの『マイ・ジェネレーション』、クリームの『アイ・フール・フリー』、プロコル・ハラムの『青い影』など60年代の名曲が次々と流れる。

子供が枕元でひっそりと。友達と一緒に踊りながら。ラジオを聴く人々の和気あいあいとした雰囲気観ていて楽しい。

60年代の名曲と、クールでキュートなファッションも楽しめる賑

やかな作品だ。

『ラヂオの時間』

ラジオドラマを生放送することになったが、一人の女優の我が儘によってラジオ現場に紆余曲折をもたらす。

アクシデントにどう対応するか、キャラクターそれぞれの性格や立場が上手い具合に描かれていて面白かった。千本のつこを演じる戸田恵子の我が儘女優っぷりが、観ていて何とも憎たらしい。

個人的に一番好きなシーンは、藤村俊二が演じる守衛(元伝説の音効係)が、全身を使って打ち上げ花火の音を再現するシーン。音を再現する姿は真剣そのものなのだが、動きがコミカルでとても可愛らしかった。

作品に欠かせない効果音は、迫力や感動を生み出し、より一層作品を引き立てる。場面を彩る音作りの素晴らしさに、改めて感動するのであった。

渡辺謙が演じるトラックの運転手もリスナーとしての姿が表現されていて、ラジオドラマの盛り上がり、リアクションがリンクしていて面白かった。

エンディング曲では、編成部長である堀ノ内修司(布施明)が、

千本のつこに對する内に秘めた思
いを歌い上げていて、思わず吹き
出してしまった。何て我が儘な女
優だ！ という、キャラクターへ
の苛立を歌で見事に吹き飛ばして
くれた。エンドロールまで飽きず
に楽しむことができる、ユーモア
に溢れた作品だった。

『Little DJ』小さな恋の
物語』

白血病を抱えた少年が、病院の
院内放送を担当することとなり、
放送を通じて患者達との触れ合い
を描いた作品。

敵を欺くには味方から

「イミテーション・ゲーム／エニ
グマと天才数学者の秘密」(監督
|| モルテン・ティルドゥム)

ドイツの暗号機エニグマ解読に
携わったイギリスの数学者アラン
・チューリングの第二次大戦秘話
戦争は死ぬか生きるか、人間を狂
気に駆り立てる。

チューリングらがドイツの暗号
を解いたあと、イギリスは敵にそ
のことが知られないようにし戦争
を有利に運ぼうと、あるときは敵
のなすがままにし、あるときは未

院内にリクエストボックスを設
け、患者達からのリクエストに応
えるシーンは、観ていてとても微
笑ましい。音楽をかける側も、か
けてもらう側も、幸せになれる瞬
間は、ラジオの醍醐味だなと共感
を覚えた。

限られた時間を懸命に生きる太
郎(神木隆之介)の姿にほろりと
させられ、大切な想い、伝えたい
言葉、今しかできないことを後悔
しないようにと思わせてくれる、
そんな映画であった。

様々な作品を借りてみたのだが、

然に敵の攻撃を防ぐ作戦に出た。
つまり敵の攻撃を知りながら味方
を見殺しにしたケースも多くあつ
た。最終的にイギリスが勝利を取
めればいいという非情な作戦だ。
いくら戦争に勝つためとはいえ、
へたをすれば国民の戦意喪失につ
ながりかねない危険な賭けだ。エ
ニグマ解読作戦は闇に葬られた
(戦後も何年間かは秘匿された)。
同胞を見殺しにした事実が公にな
ることは政府としては隠しておき
たかった。しかし結局イギリスは
勝利し、暗号解読で終戦を2年早
められ、1000万人以上の人命
を救えたという。

それぞれ毛色の異なる内容で、ラ
ジオというテーマをとつても色々
あるのだなと思った。『ラジオの時
間』がより内部事情や役割につい
て詳しく描かれていて、とても興
味深かった。

スマホでゲームができる時代と
なり、ラジオを日常で聴く機会は
減ってしまったかもしれない。そ
んな中でも時代とともに変わらず
放送が続いているのは、ラジオの
温かさや楽しさを知っているリス
ナーが、今も変わらずにいるから
だと思う。

エニグマ解読機というのは要す
るにコンピュータだ。それを5人
ぐらいで手づくりで作り上げた。
エニグマの暗号は毎日キーワード
が変わるので、解読が難しい。あ
るとき、キーワードを変えないこ
とがあることを知り(あるところ
では恋人の名前をキーワードにし
ていた)、そこから解読のヒント
をつかむ。解読メンバーのなかに
はロシアのスパイがいた。それを
M16(イギリス情報部)も知っ
ていたというから驚きだ。戦争は
騙し合いに勝ったものが勝利する。
単に物量の差ではなく、情報戦も
重要なのだ。しかし、勝ったから

ラジオのサイト内ではツイッタ
ーが組み込まれ、メールよりも早
い反応が生放送の楽しさをより一
層引き立てている。放送された曲
もリアルタイムで紹介され、氣に
入った曲は「アマゾン」や「アイ
チューンズ・ストア」などで購入で
きるようになっていく。

いつも聴いている音楽からラジ
オに切り替えてみたら、素敵な音
楽や番組と出会えるかもしれない。
通勤しながら、家事をしながら、
ラジオを聴いてみてはいかがでし
ょうか。

そう言えるのだということを肝に
銘じておきたい。

アラン・チューリング役はベネ
ディクト・カンバーバッチ。繊細
な技術者を好演。その恋人ジョー
ンはキーラ・ナイトレイ。チュー
リングがジョーンに針金で婚約指
輪を作って渡す場面がいい。ジョ
ーンがチューリングを同性愛者と
知りながら愛を貫こうとしたのは
立派。戦前および戦後の数年間、
イギリスでは同性愛者は罰せられ
ていたらしい。

(流漂介)

エイブラムスよ、 ルーカスの『スター・ウォーズ』を 越えろ!

門馬徳行

『スター・ウォーズ』(以下、SW)は、既に6本公開されているが、これらの作品は時系列には公開されていない。『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズが時間の経過順に作られたのとは対照的だ。全体で6エピソード(以下EP)あるが、EP1〜3は、大まかに言ってアナキン・スカイウォーカーがダース・ベイダーになるまでの物語。EP4〜6は、アナキンの息子ルーク・スカイウォーカーがジェダイになって帝国を打倒するまでの話になっている。つまり後半のE

P1〜3は、EP4〜6の前日譚というわけだ。当初はEP9までジョージ・ルーカスは考えていたらしいが、後に6部作と変更になっている。しかし、2012年にディズニーがルーカスフィルムを買収し、EP7〜9の制作が決定。今回、まず、EP7「フォースの覚醒」が2015年12月に公開されることになった。これを演出するのが、ルーカスではなく最近好調のJ・J・エイブラムス。伝説的作品をどう再構築するのか興味が尽きない。彼はトム・クルーズの『M...i...III』で監督デビューしているが、それまでにTVドラマで数々の作品に携わっていて(『LOST』『フリンジ』など)、いずれの作品も話がユニークで面白い。これらを観ると、彼は自らの演出に固執せず作品の受けが悪いと軌道修正できる柔軟さをもっている。加えて、単なる活劇だけに終始するのではなく必ずエモーションな(泣かせどころ)を忘れない。言ってみれば、エイブラムスはしたたかで現代的な映像作家だと言える。すでに、新作の3分を越える特報映像(2本)が発表されているが、まだ全貌はつかめていない。

「SWは西部劇でとき話だと考えているから、ジョン・フォードの映画のような砂漠のセットをオープニングにしたかった。あの世界を作り上げるためにはCGだけではなくリアルなセットが必要だった……」と語るエイブラムス。ここでジョン・フォードの名がでてくるあたりはきわめて興味ある視点(SF西部劇)だ。

1978年に初めて公開されたEP4「新たな希望」は、言わばSFの金字塔的作品と評価され、ほかの映画、コミック、アニメに多大な影響を与えたのは事実。当時、スピルバーグの『未知との遭遇』も公開され、SFファンが「スター・ウォーズ派」と「未知との遭遇派」に分かれたという経緯がある。そして、SWは「PLA Y」の映画で、未知との遭遇は「RAY」の映画と言われたものだ。また、一部ではジュラルミン製のお伽噺との低い評価もあったが、何と言っても宇宙空間を飛びまわるXウィング・スターファイターやミレニアム・ファルコン、主力戦艦スター・デストロイヤーなどの船体が、ただ輝いてるのではなくいかにも戦いで汚れ、傷ん

だ感じが表現されていたのが一番の驚きだった。ルーカスはトラブルが連発し困難を極めた撮影状況に嫌気がさしたのか、もう監督はやらないと宣言した。1980年に公開されたEP5「帝国の逆襲」は、このシリーズ中で屈指の出来と言われている。ルークが戦っていた敵が自分の父親だったという衝撃的展開で観客をうならせた。

SFXも見せ場が連続で雪上の決戦など飽きさせなかった。実は特撮にもつと予算と時間がとれば、あれ以上の映像にできたとスタッフが残念がったという話が残っている。この作品の監督はルーカスではなくアーヴィン・カーシュナール。ルーカスはラッシュを見て、映画を壊していると激昂し、これは自分が出資してるからと好きなように編集しなおしたが、公開がせまり妥協して上映せざるを得なかったと言われている。それでも、レイア姫がソロに「I love you」と言うソロが「I know」と切り返すシーンが、今も語り草になっている。

1983年に公開されたEP6「ジェダイの帰還」は、ルークとベイダーの親子再対決がメイン。レイアに自分たちは兄妹だとルーク



『スター・ウォーズ』エピソード4「新たな希望」

は告げ敵陣に乗り込む。前作で凍結されたハン・ソロが解凍され活躍。皇帝パルパティーンはダークサイドにルークを誘う。が、父親としての意識をベイダーは失ってはいず、ルークの絶叫に皇帝を突き落とす。イウォークとの地上戦はダレ気味だったが、第2デス・スターを破壊した反乱軍は帝国軍に勝利し物語は一応の完結を見る。

この後、10数年後に作られた3本(EP1〜3)の作品の評価はなぜか芳しくない。EP1「ファントム・メナス」(1999年)の見せ場が冗長なポッドレースとは弱い、クワイ・ガンがダース・モールに倒される意外性は効いて

る。不評だったのはジャー・ジャー・ピンクス。やたらうるさいキヤラだった。アナキンとパドメの禁じられた恋を描いたEP2「クローンの攻撃」(2002年)は平板だった。ルークの演出は活劇シーンになると冴えわたるのだが、2人(アナキンとパドメ)が絡む場面になると長くなり鈍摩し、2人の演技の硬さばかりが目立つ。さすがに、アナキンがダース・ベイダーに変貌するEP3「シスの復讐」(2005年)は、アナキンとオビ・ワンとの師弟対決、ヨーダとパルパティーンとの戦いもあり盛り上がりを見せる。パドメが双子を出産し、後のルークとレイアと繋がっていく伏線もぬかりない。3本全ての脚本を書いたルーカス(監督も兼任)は暗めのストーリーに終始し、前シリーズ(EP2〜4)にあった宇宙活劇冒険のムードは消えている。代わりにとどろどろした人間関係がドラマの中心になっていた。もっとも、これはダース・ベイダーがダークサイドへ落ちて行く話であるからやむを得ない。だが、SFの世界は、言ってみれば勧善懲悪の世界でルーカス当初の狙いも「広大な宇宙の冒険談」だったはずだ。

しかし、SW全6作はダース・ベイダーの贖罪の話だとも彼は本音を漏らしている。闇の世界を描くというルーカスのスタンスは間違っていない。闇の世界を描かねば明るい未来など描けるわけがないだろう。ただ、単純明快なSF活劇を見たかった私の期待は、この3本を見て萎んでしまったことは事実であった。

SWを全般的に見ると、日本文化の影響が見られる。スカイウォーカーは柔道着みたいなのを着てるし、日本刀のようなライトサバーがでてきたり、ダースベイダーのデザインもどこか武将の姿に似てる。ルーカスは黒澤の「隠し砦の三悪人」を参考にして脚本を書いたという。つまり日本の時代劇がSWのベースになっていたとも言える。ライトサバーを使った戦いはまさに時代劇と言えるかもしれない。

新作には、旧3部作(EP4〜6)に出演した役者たちが顔を見せるそう。もう若くない彼らがどんなシチュエーションで、どんな芝居を見せるのか楽しみでならない。物語の設定は、EP6から30年後の話になっている。キャリ

ー・フィッシャー(レイア姫)、マーク・ハミル(スカイウォーカー)、ハリソン・フォード(ハン・ソロ)の3人のほかチューバッカも復活する。もう帝国軍は崩壊しているし、ルークの父親ベイダーも皇帝パルパティーンもいない。銀河系宇宙に平和は戻ってきているはずだ。だが、皇帝に変わる第2の闇の帝王が出てくるのか。彼はダークサイドの復活にかけて生き残りの帝国軍を操り戦いを仕掛けてくるのか。あるいは、銀河系ではなくまったく別の遠い宇宙の彼方からの侵略があるのか。

「フォースの覚醒」というタイトルから見ると、新ジェダイが登場するのはまちがいないだろう。ハン・ソロとレイア姫の間に2人子供が、ルークにも子供がいるというから、彼らフォースを持つ次世代の戦いになると思われる。

エイブラムスに注文をつけた。最初の作品世界に回帰するようなSWにしてほしい。娯楽精神にあふれた波乱万丈のSWにしてほしい。そして、ルーカスの世界を越えた新しい伝説を作ってほしい。それがエイブラムスに課せられた宿命なのだ。

あたしの好きなSF

『プリデスティネーション』

岩館 範子

SFは、何がでてくるかわからないし、どうなるかわからないから面白い。本と違って映画は最初から映像でだされてくるから、理解するのに多少の時間は必要だ。それでも何かが気に入ればお気に入りの1本になる。

最近ある作品を観た。『プリデスティネーション』というタイトルの。タイトルからは何も伝わって来ないが、これが結構面白かった。タイムトラベルもので、双子監督ピーター&マイケル・スピエリッグの作品。『究極のタイムパラドックス』小説と呼ばれるロバート・A・ハインラインの短編小説『輪

廻の蛇』を映画化したもの。SFサスペンスである。原作は、文庫本で22ページしかない。未読。『ブレードランナー』も原作が短い、更に短い。ハインラインは、1958年に1日で書き上げている。『輪廻の蛇』とは、自分で自分の尻尾を永遠にかみ続ける蛇、ウロボロスのこと。タイトルの *predstination* は、“pre (前もって) destiny (運命)” が決まっている” という意味。(運命予定説と訳せる)

ストーリーは、1970年ニューヨークの酒場で、常連客のハンサムな青年(サラ・スヌーク)とバーテンダー(イーサン・ホーク)が雑談を交わすところから始まる。バーテンダーは、未来からやってきた時空警察の“航時局”の局員。凶悪な連続爆弾魔フィズル・ボマーの犯行阻止が目的。2人は長い間話した後、青年を63年へ連れていく。その後もバーテンダーはいろいろな時代を訪れる。最後には、フィズル・ボマーとの直接対決も待っている。

①1970年、青年は“未婚の母”というペンネームで、雑誌に不幸な女性の告白話を書いているライター。バーテンダーが、何で

女心がわかるのか聞くと、実は女として生まれてきたと話す。その内容は、1945年9月13日、オハイオ州クリーヴランドの孤児院に拾われジェーンと名付けられた。引き取り手もなくかわりものとして育ったジェーンの前に、ロバートソン(ノア・テイラー)という謎めいた男が現れる。政府系企業スペースコープに誘われ、宇宙に憧れていたジェーンは適正試験を受ける。でもおしくも落選。

家政婦の仕事をしながら、女性としてのマナーを学ぶチャームスクールに通い始めた。そこで人生が一変する出来事が。そのキャンパスで出逢った男にひと目ぼれしてしまったのだ。流れ者のその男は、他人とは思えないほど波長が合い、恋に落ちてしまう。

ところがある夜、公園でデート中に流れ者は「すぐ戻る」と言い残して忽然と姿を消してしまふ。失意のどん底につき落とされたジェーンは、更なる悲劇に見舞われる。流れ者の子を妊娠し、病院で出産。男女両性を兼ね備えていることが発覚。出血がひどく、命の危険にさらされたジェーンは、卵巣と子宮を摘出して命をとりとめ、それ以来男として人生を歩むこと

になる。しかも赤ん坊は、病院に侵入した何者かに誘拐されてしまふ。

バーテンダーは、この青年に初めて会ったのではなく!?ジェーンからジョンに改名したことも知っている。流れ者を憎んでいるのなら復讐させると言い、地下室へ連れていく。そして“時標変界キット”という機械を取り出し、タイムスリップする。

②タイムスリップした先は、ジェーンが流れ者と出逢ったチャームスクール。驚くジョンにバーテンダーは、未来からきた航時局員で、時標変界キットはタイムマシンだと明かす。もう引退を考えているから、後を継いでくれるように言う。それを条件に流れ者に復讐するための拳銃を渡す。それを受け入れ、キャンパス内で流れ者を探しはじめる。そこで会ったのは、7年前の自分自身、ジェーンだった。

③1970年3月2日、ここでバーテンダーには大事なミッションがある。爆弾魔フィズル・ボマーをこの世から葬ること。ジョンと別れ、単独でタイムスリップ。フィズル・ボマーが現れる現場、ボストンのアブラハム&ベイリー

社ビルへ向かう。タイムスリップで疲労していたので、格闘の末に取り逃がしてしまふ。ここでやけどを負ったジョンを見つける。

④ 1964年3月2日、バーテンダーはとある病院へ向かう。そこに現れた航時局の幹部ロバートソンが、「未来への種は撒き損ねるな、頼んだぞ」と言い残す。新生児室に侵入し、ジェーンが生んだ赤ちゃんを誘拐。1945年9月13日にタイムスリップ。赤ちゃんは孤児院の玄関へ。

⑤ 1963年6月24日、バーテンダーに導かれて巡り合ってしまったジョンとジェーンは情熱的な恋に落ちていた。公園でのデート中、バーテンダーが現れたのに気付く、「すぐ戻る」とジェーンに残してジョンはその場を離れる。バーテンダーに「これが宿命だ」

と告げられ、つらい別れに胸をしめつけられる。

⑥ 1985年8月12日、局本部に戻ったバーテンダーは、後継者のジョンを医務室に預ける。引退後の生活を送るため、最後のタイムスリップ“をする。フィズル・ボマーが大勢の市民を巻き込む史上最大の爆破事件を実行しようとしている75年のニューヨーク。ここでバーテンダーの本当の宿命、呪われた真実がわかる。コインランドリーでフィズル・ボマーと対峙すると、自分の年老いた姿だったのだ。時標変異キットがエラーで、引退してもジャンプをくり返し犯行におよんでいたのだ。バーテンダーは、フィズル・ボマーを撃ち殺してしまう。

ジェーン＝ジョン
生まれた子＝ジェーン



『プリデスティネーション』ポスター
ジョン＝流れ者
バーテンダー＝ジョン
バーテンダー＝フィズル・ボマー
映画の冒頭シーン
が、手術後で顔が元の顔ではない、声も元には戻らないと言
うセリフ。そしてバ

ーテンダーの顔が現れる。てっきり元からそういう顔と思っていたしまが、元はジョンだったという事だ。要するに、全部同一人物ということ。『タイムパラドックス』大いなる矛盾“もいここ。父親も母親も恋人も赤ん坊も誘拐犯も全部自分という話。航時局のロバートソンの、バーテンダーは過去とも未来ともつながりがないというセリフがあった。何の事かと思っていたら、全部ひとりで行っているからだ。

究極のタイムパラドックスと言うだけあって、現実にもSF的にもありえないけどお話しとしては面白い。こんなストーリーは考えつくことも出来ない。原作の目まぐるしく時代と場所がかわる物語の構造はそのまま。ほぼ全ての要素がセリフも含め生かされている。短編なので、映画は人間ドラマ部分をふくらませている。“未婚の母”の少女時代のエピソードをかなり増やしていると言う。政府系企業スペースコープ社の適性試験をうけているところもそうだ。ジェーンは、見た目は回りの女の子と変わらないが、強かった。体を動かすのも平気。具合悪くなっている娘もいる時にニコニコして楽し

そうだった。結局暴力で落ちてしまふけど。そのキャラひとりを、ホークとスヌークが演じてるのはびっくり。ジョンが酒場に現れた時は、レオナルド・ディカプリオのような顔だとは思ったけど、男だと思ってた。特殊メイクのおかげもあるだろうけど演技力がある。ホークのバーテンダーもはまっている、話にすんなり入ることが出来た。一番面白かったのは、バイオリンケースがタイムマシンだったこと。取っ手部分のダイヤルをジャンプしたい年月日時間に調整するだけ。1メートル以内の物体をタイムスリップさせてくれる。ゼロ地点(1981年)から53年以上時空移動してはならないという制約はある。タイムマシンは今まで乗るものだと思っただから。あつ、例外は『パタフライ・エフェクト』。ノートを読むとタイムスリップ出来る。映画館で一度観て理解するのは難しいけど、きちんと説明してくれてるはず。SFって言ってもいろんな作品がある。苦手な人もチャレンジしてみよう。

MIBとつきあって17年

『メン・イン・ブラック』2 & 3

藤井陽子

振り返れば、この『シネマ気球』に生まれて初めて映画感想文を載せて頂いたのは1998年の短大生の頃で、その記念すべき初寄稿感想文が「メン・イン・ブラック」だった。

もう17年も昔なんだなあ、と、驚き。

17年経って、再び「メン・イン・ブラック」の感想文を書くことになった今回。

浦島太郎な自分は、まさかパート3が制作されていたとは知らなかった。

ちょうど二十歳以上も年上の知り合いの壮年の方と宇宙について

ハイテンションで語り合っていた最中、「メン・イン・ブラック」2 & 3がテレビ放映される事を知り、その方にも「宇宙と言えばメン・イン・ブラック！ 凄く面白いからぜひ観て下さい」と、半ば無理やりオススメしたのだった。

半ば無理やりオススメしたわりに、その方もなかなか楽しんで観たらしい報告を受けて自己満足に浸った。

パート4の制作も浮上していた事をつい最近ネットの情報で知ったけど、想定外に息の長いシリーズになつていた事に、この映画の人気の高さを認識する。

内容に触れていく。

パート1の最後、K（トミー・リー・ジョーンズ）はJ（ウィル・スミス）に「もうお前ひとりです仕事できるだろ」的な事を言つて、MIB（銀河系移民局）を引退。

Jにあの記憶を消す棒（ニューライザー）を押させて、エージェンツKとしての記憶を抹消した。

続くパート2では、冒頭から悪者エイリアンのサリリーナが登場。25年前、ザルタ星人が「光（アーケネット）」を隠すために地球上にやつて来た。

運命を左右する重要なもの。

その光が地球上にあると、逆に色々と問題だからということ、地球外に持ち出す（持ち去る？）ようMIB内でエージェンツ達に命令が出され、光を地球外に持ち去る事に成功したのが、優秀なエージェンツKだった。

しかし、パート2ではなぜか持ち去ったはずの光が再び地球上に存在しているという展開に。

どうしても光を手に入れたいサリリーナに先に光を見つけれられてしまうと、手に入れた光を再び地球外に持ち去られてしまいかねないと危惧するサリリーナによつて優秀なKはきつと殺されてしまう。だからMIBはサリリーナよりも早く光を見つけないといけない。そしてそのためには、当時の状況と事情に詳しいKの記憶がなんとしても必要だった。

そこで、パート2の途中まで郵便局で普通に働いていたKをMIBに連れ戻す事に。

そしてKは再び、MIBのエージェンツとして、Jと一緒に責務を果たすことになる。

パート3では、そのKが実は40年前に亡くなっていたという設定。「マジかよ!」な展開に。

極悪エイリアンのボリスが、タイムトラベラーを使ってKを殺したんだと。

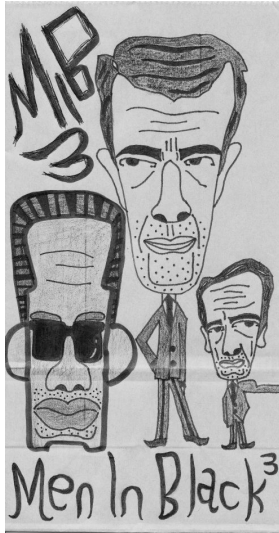
パート3にきて、タイムトラベラー（タイムスリップ、タイムワープ）という設定を持ってきたところに、「まさかの!」てな感じだった。

この手の設定を使うとストーリーが何でもありみたいになつてしまいうなイメージだから、正直どうかと思った。

随分過去に死んだとされるKを考えれば、そのKがリクルート（エージェンツとしてスカウト）したJがそのままMIBのエージェンツつていうのも、過去が変わつた（Kが40年前から存在してなかった）のに現在はそのまんま（Kなくしては存在しなかったはずのエージェンツJがエージェンツのまんま）というのは、なんか辻褄合わなくね?と思ったのだけど…ま、細かい事はいいんですって事で。

ともあれ、Kを助け出すため、Kが殺される前の時代にJもタイムワープしたところ、なんと若かりし頃のKに出会っちゃって、Jはオタオタ。

若かりし頃のKを演じた俳優さ



イラストも筆者。画材は紙袋

そんなKの姿が印象的だった。KとJ。切っても切れない絆の強さは、ここから始まっているのかと思わせるシーンだった。

ん、全然知らないけど声と喋り方がトミー・リーにそっくりだった。なんやかんや(?)で、ボリスの片腕を落とせばKは殺されずに済むという話で、Kを守るためにJの奮闘は続いた。

ボリスもタイムワープしたのかなんかで、昔のボリスと今のボリスが両方登場してボリス同士でガチンコしてたりで、かなりのてんやわんや。

未来を予見する能力を持つエイリアンの登場もあり、2人のボリスと過去のKと今のJが死闘を繰り広げた結果、無事にロケットの先端に光を取り付け、地球外に持ち出す事に再び成功。

その決闘ぶりにしばし疲れたけど、めでたし。

と思っていたら、最後に待っていたのは想定外のおロリな展開。Kの命が助かる代わりに、誰か

別の命が失われてしまうという事で、代わりに命を失ったのが、それまでKとJに理解を示して協力してくれていたアメリカ軍隊の大佐の男性だった。

そしてその大佐は、実はJの実のお父さん。

立派なお父さんでした。

責任感と誇りと友情と愛情に溢れた、息子が憧れるようなお父さんだったと思う。

お父さんは、しぶとく生きていて最後に突然やってきた過去のボリスに撃たれてしまい、死んでしまった。

そのボリスは勿論、Kによって殺された。

お父さんを探している幼いJ少年に、Kはニューライザーで記憶を消してあげて、優しくいたわる。

「君のお父さんは、英雄だ」と、言葉少なにJ少年を抱擁するように励ます。

さて。

MI Bに登場するエイリアンは、「おえー」レベルのキモイのが一杯だけど、可愛いのも一杯。

パート2でJのパートナーを一時期務めていたバグの姿のフランクは勿論、パート1で、エイリアンの頭の中の小さな操縦席で操っていたミニミニエイリアンも可愛かったし、パート2で登場した180メートルの巨大ミミズのおっとりしたエイリアンは、無機廃棄物を食べるのが大好きという可愛さ。背負ったリュックから喋る時だけ顔を出す、同じ顔をしたちっこいエイリアンも笑えたし、パート3に出てきた中華料理店のウーとか、その食材のマスコットみたいなエイリアンも、奇妙で可愛かった。

それと、Kが一時期働いていた郵便局の局員の殆どが実はエイリアンで、みんなわりと働き者だった。

「だからここが居心地いいんだよ」とJに言われてキョトンとしていたKが面白かった。

どのエイリアンもキャラがしっかりしていて、見た目も凝っている。

それを見るのがまず楽しい。

何より、沢山の超有名人たちが実はエイリアンという設定でちょろちょろ登場しているのが良かった。スピルバーグ、マイケル・ジャクソン、ガガ、ウオーホールなどなどさりげに登場していて、「ウオーリーを探せ」ばりに見つける楽しさもあったのだ。

ところで、余談だけど。

パート3でタイムスリップという設定にしたところ。

そしてそれにより、トミー・リーの出番が殆どなかった状況について。

自分としては、トミー・リーが実はもうMI Bにあんまり出たくなって(単純に飽きたとか、騒がしいのはもうカンベンとか、とにかく勝手ながらやる気が出ねえとか、モチベーションがゼロとかで...)でも監督や制作サイドは作りたくて、だからパート3はウィル・スミス1人でだいぶ頑張ってもらって、トミーの出番を極力減らす配慮を施し、しかしKの存在は映画の中に常駐させたい...そのためには、タイムスリップで若かりし頃のKをふんだんに登場させて、別の役者を使えばおけ。

...的な事を、暇潰しにプチ妄想しておりました。

中国映画「二重生活」 を観て思ったこと

堀江広子

感慨深い映画となった。

ミステリー仕立てにしたわけ

内容は、中国一人っ子政策のひずみや、はびこっている賄賂社会を背景に描かれたミステリー仕立ての男女三人の物語である。脚本も手がけたロウ・イエ監督は、二〇〇六年に「天安門、恋人たち」という天安門事件を扱い中国ではタブーを破った人である。発表後五年間は中国政府から映画製作禁止令を受け、禁止令が解けた後に再びメガホンを手に製作した作品である。まずはミステリータッチに仕立てたところが凄くいいと思う。

民主的政治が望めない国には様々な社会問題が横たわっている。それを直接描いたりするのが困難な場合、ミステリーを前面に押し出しつつ、監督の思いを忍ばせるやり方がとても効果的だ。

数年前に筆者がその映画評を書いた、「デビルズ・バックボーン」(監督ギレルモ・デル・トロ)というホラー映画は、スペイン内乱を背景に大人の内面にひそむ悪業を隔絶された孤児院を舞台にして描いたもので、監督の思想を存分に汲み取ることが出来た。

ロウ・イエ監督は、「人の思いや社会の(やっかいなこと)」を反映するのが映画なのだから、ストリートに表現すれば当然検閲に引っかかる。ミステリーにすることによって検閲の門をくぐり抜けられるかもしれないと思った。」と語っている。

そうだ、中国には検閲という厳しい制度があるのだ。表現の自由が、当局の規制や制限によって阻まれてるので公に国内で本音を語るのは難しいのだろう。

近くて遠い隣人

政府に都合の悪いことはたちまち報道規制され、表だって政府の批判をしようものなら、いとも簡単に検挙されまともな裁判もなく投獄されてしまうこともしばしばあることだと聞く。最近では日本でもマスメディアに圧力をかけるような発言をする政治家たちがいるから、将来的にこの国の民主主義も危うい事になりそうな気がしてならない。

日本在住で、数年前に芥川賞を受賞した中国人の楊逸(ヤン・イー)さんという女性作家がいる。この方によると、留学生として日本に渡ってきたときに、街ゆく人

々や日本の友人たちがおおっぱりに政治への不満や、怒りをぶちまけているのを見て心底驚いた、中国では考えられないことだ、これがいわゆる民主主義というものかと感じた。それと天安門で蜂起した人たちは民主主義ということも分からず自分たちの感性や暮らしが抑圧されていることに我慢がなくなっただけだったと思う。目立って先導する指導者も、思想をアジする人がいたわけでもなく、自然発生的だったからその終焉もあつてなく、武力で人々の思いは蹴散らされてしまったと。

二十六年前に起きた天安門事件では、戦車の行く手を阻むようにひとりの男性が立ち向かっていた映像が思い出される。

人口は日本の十倍以上、国土もあのと通りの広大さで、多数の異なる民族が入り混じる国の一つに治めていくのは至難の技だろうし、実際大変そうだな。

現在中国国内では、大都市のみならず地方都市の役人に対して賄賂や贅沢な接待等を慎むよう箝口令がしかれているらしく、最近でも共産党大幹部に収賄容疑で無期懲役の判決が出されており、習近平体制は国内外へのイメージアッ

中国映画といえど、古くはブルース・リーのカンフー映画やジャッキー・チェンのアクション映画、わりと最近のものでは、チャン・イーモウ監督、チャン・ツイイー主演の「初恋のきた道」とか「HERO」「LOVERS」などを観てきた。「初恋のきた道」は瑞々しい作品だが素朴過ぎて物足りなさを感じたし、他は特殊撮影が目立ち内容的にはどうということもないように思っていた。

何かもつと違うものが生み出されないものかと感じていたところ、この映画に出会えたのである。

それだけに、筆者にとって大変

プに必死のようである。

尖閣諸島への実効支配や南シナ海で強行に進めている埋め立て、観光地でのマナーの悪さなどが、事あるごとに報道されて日本人の中国人に対する見方は決して良いとは言えない。

中国人の人々の日常や本当の姿を日本人は殆ど知らない。近くて遠い隣人なのだ。

妥協しない中国の女性

中国は男女平等の社会であるはずだが、儒教の影響と一人っ子政策で、子どもは男の子が望まれているようだ。

このことが映画でも深い影を落としている。男は大学の同級生と結婚し、妻と事業をしている。女の子に恵まれ妻は今では子育てに専念している。日本の家庭と違うのは妻が専業主婦でも比較的裕福な家ではメイドや運転手を雇うのは普通の事である。戦前から上海などは欧米の文化の影響を受けているためだろう。

妻子のある身で男は、愛人に男児を産ませてときおり愛人の家へ過している。

妻がすべてを知ったとき、愛人が妻に言い放つ。男の子を産んだ

とき、男の母がとても喜んで祝ってくれた、自分は日陰の身ではないと。

ここから先の展開が、中国だなぁと感じたのは、まず妻は離婚して家から夫を追いつ出し、事業は自分が引き継ぎ夫を解雇してしまうのだ。

中国人女性の多くはいざという時、妥協を一切しないと聞いたことがあるが、こういうことなのかと思った。

どの映画でも、一番最初のシーンが重要だ。ワクワクする瞬間でもある。本作の冒頭シーンもなかなか印象深いロングショットで見せてくれる。

長江であろう大きな川にとつともなく長い橋が架かっている。土砂降りで暗い雰囲気だから、観る者の胸にすでに不吉な予感がよぎる。

カメラは橋を渡る一台の車を上から追っている。車の中は大音量の音楽が流され、数人の若いカップルたちがはしゃいでいる。

橋を渡りきり、街に出る前の山道にさしかかったところで、いきなり山の右斜面からひとりの女性が転がり落ちてきてその車に轢き殺される。

後に轢いた若者は党幹部の息子と判明、轢かれた女性は女子大生だが、事故の際に負ったとは思えぬ頭の傷から、刑事の一人が、単なる交通事故ではなく事件ではないかと疑う。

この事件が主人公たちとどう関わっているのか、どのような役割を果たしているのかは終盤にならないと分からない。

メイドを雇えるほどに豊かで豪華な家に住む夫婦の暮らしと、スラム化したような古びたアパートに住む母子生活の対比、そここに見られる経済格差、警察も手を出せない中国党幹部の賄賂やらが重層的に入り混じり、スリリングでもあった。

今年の六月四日（天安門事件の起きた日）には、学生、市民らが十三万人規模で天安門広場に集まったと報道された。二十六年経った今も、あの日に起きた事を再び自らの問題として検証しようとする大衆のエネルギーと、民主化への熱望は消えていないのだと感じた。

当局の睨みや圧力に屈せず、映画を撮り続ける若き五十歳のロウ・イエ監督に心からエールを送りたい。

映画の本

「ぶれない男 熊井啓」（西村雄一郎）

交遊録の形で熊井啓の人となりを描き、作品を論評している。熊井の作品の面白さは社会派にあると思う。しかし、筆者は「千利休 本覺坊遺文」が最高傑作としている。わたしにその良さはわからなかった。茶の湯というのは趣味の世界ではなく、生き死にの世界に通ずるものと厳粛な儀式らしい。監督は、音楽を頼んだ伊福部昭から、白地に黒字のタイトルだけでは音楽が書けないので何か映像を撮ってくれと言われ、それで追加撮影をしたという。そういうことがあるのだ。

「忍ぶ川」は加藤剛と栗原小巻が主演して1972年のキネマ旬報のベスト1に輝いたが、最初、吉永小百合の強い希望もあり、小百合と吉衛門で撮る予定だったという。それが吉永の父親（ステージパ）からさまざまな注文が入り——例えば「相手役は舟木一夫にして、小百合とのデュエットを挿入してほしい」「白黒スタンダードでなくカラーシネスコで」「暗い血の部分、初夜のシーンはカットしてほしい」など——監督自身嫌気がさして、その案は流れたという。

(T・S)

終

ボッチャとタクシー

『抱きしめたいー真実の物語ー』

関口健一

ある知人から「関口さんのことが思い浮かぶ映画があるよ。機会があったら、見てみな！」と昨年の冬に言われた。それが『抱きしめたい』だった。『抱きしめたい』の公開は、2014年の2月。映画館へ見に行きたかったが、インフルエンザが流行っていて見に行くことができなかった。わたくしがこの映画を見たのは、劇場公開した1年後の今年の1月だった。

車椅子のヒロイン

この物語のヒロインは、つかさ。つかさは、交通事故で車椅子の生活を送っていた。そして、つかさ

の夫の雅己はタクシーの運転手をしていて、つかさと雅己には、和実という息子がいた。だが、つかさは和実を産んだ一週間後に亡くなってしまった。

つかさが亡くなって5年の歳月が経ったある日、つかさの法事が行われる。法事に出席した人は、夫の雅己、息子の和実、つかさの母親、雅己の両親、つかさの友人、雅己の同僚だ。つかさは、生前周りのたくさんの人たちに愛されていたのだった。

つかさの祭壇の前で、和実は「お母さんは何で死んだの？」と雅己にたずねる。ここから、つかさと雅己のラブストーリーが始まる。2008年の冬、つかさは網走のある体育館にいた。つかさは、男の人と体育館の利用権について口論していた。電話予約をしていたつかさ。インターネット予約をしていた男の人。体育館の事務員のミスで同じ日時に体育館の利用者が、2グループになってしまったのだ。

男の人はつかさに譲ってあげると言ったが、つかさは男の人の言い方が気に入らない。そこに現れたのが仕事帰りの雅己だった。雅己は、タクシーの運転手をやって

いた。そして、趣味でバスケットボールをやっていた。つかさが口論していた相手は、雅己が所属していたバスケットボールのチームの人だったのである。結局、体育館を半分ずつ使うことにした。

ちなみにつかさは、ボッチャというパラリンピックの正式種目である障害者のスポーツをやっていた。ボッチャのことは、あとで詳しく書くことにしよう。

ボッチャとバスケットボール、全然違う2つの球技を同じ体育館で同時にやる！ボッチャ競技者として、さぞやりづらかったと思う。

つかさも雅己も練習を終え、帰ろうとしていた。雅己はつかさに家まで送ってあげると言った。でもつかさは、勤務時間外みたいだから悪いし買い物をして帰るからと言って断った。しかし雅己は、買い物もつき合うから乗りな！とつかさに言う。つかさはありがたく、雅己が運転するタクシーに乗る。そして、雅己が運転するタクシーはつかさを乗せて隣街のショッピングモールへ向かった。

ショッピングモールに着くと、電動車椅子で店内を駆けずり回るつかさ。駆けずり回るつかさのあ

とを着いて行く雅己。実は雅己は、つかさに好意を抱いていた。

雅己はつかさに「何を買おうとしているの？」と聞く。「忘れた！」と答えたつかさは、忘れないようにメモした紙を忘れたという事故で記憶傷害も引き起こしていた。つかさと雅己は仕方なく、家に帰るのだった。

つかさの友達を交えて、交流が始まった。やがて、つかさも雅己を意識するようになって行った。

ある夜のこと、つかさと雅己はご飯を食べて、雅己はつかさが一人で暮らしているアパートに送って行く。その日のつかさは、お酒を呑んでかなり酔っていた。その日はつかさの様子を見に、つかさのアパートにつかさの母親が来ていた。つかさの母親は、酔って若い男性に抱えられて帰って来たつかさの姿を見て唖然としていた。雅己はつかさの母親に、娘さんとお付き合いしていて結婚したいと伝える。だが、つかさの母親は「そういうことは、しらふの時に言うてほしい」と言って雅己の話をあえて聞かなかった。雅己はその夜はそのまま自分の家に帰って行った。しかし、つかさの母親は、つかさと雅己の交際には反対してい

たのだった。障害者の娘と一緒に
なっても、雅己は苦勞するだけ。
そんな雅己は、つかさに嫌気がさ
し逃げてしまい、つかさは幸せに
ならないと思っていたのだった。

数日後、つかさと雅己はドライ
ブがてら雅己の実家へ行った。雅
己が両親につかさを紹介するなり、
雅己の父親は家を飛び出して行く。
雅己は慌て父親を追いかけて行く。
「なんで、逃げるんだよ!」という
雅己の問いに父親は「あの足、見
たかよ!? オレは孫の顔も見らん
ないのかよ」と言いながら泣き出
した。その頃、つかさと雅己の母
親は意気投合! まるでほんとの
母娘のように、笑いながら話して
いた。雅己が家に帰ってきてから、
しばらくして雅己の父親も帰って
きた。帰ってきた雅己の父親に雅
己の母親は、つかさちゃん良い娘
よ!と言う。雅己の父親は仕方な
く、つかさを受け入れる。

が支えていますので!と言っても
メリーゴーランドには乗せてもら
えなかった。仕方なくあきらめて遊
園地内のレストランで食事をして
いたら、係員がやって来た。そし
て、今なら空いていますので特別
に乗せてあげますよ!と言ってメ
リーゴーランドのところに案内し
た。つかさは雅己に抱かれて、メ
リーゴーランドに乗る。そしてメ
リーゴーランドが動き出すと、雅
己はメリーゴーランドから落ちな
いようにつかさのことを支えた。
やがてメリーゴーランドの上下の
動きに合わせてキスをした。それ
もメリーゴーランドが上下する度、
何度も何度もキスをした。僕は、
こういうキスの仕方もあるんだな
:と思い、胸キュンしながらその
シーンを見ていた。

ある日のことだった。つかさの
母親は、つかさのアパートに雅己
を呼び出した。そして、雅己にあ
るビデオを見せる。そのビデオに
は、交通事故直後の痛々しい姿で
リハビリに励むつかさが映ってい
た。そのシーンは、苦しいリハビ
リを泣きながら受けているシーン
だ。つかさを演じる北川景子は、
すっぴんで髪を振り乱して実際に
リハビリを受けている姿だった。

僕は、北川景子の演技力に驚きな
がら見ていた。
それから数ヶ月後、つかさは雅
己の子供を身ごもった。二人の結
婚に反対していたつかさの母親は
驚いた。一旦は激怒したが、つか
さの妊娠を受け止めた。そして、
つかさと雅己の結婚を認めた。
雅己は二人で暮らすには今暮ら
しているアパートでは狭いと思い、
マンションを探していた。しかも、
つかさが動き易いようにバリアフ
リーの部屋を条件にしていた。
一方つかさは、雅己の母親やお
姉さんに、ミルクの飲ませ方やオ
シメの換え方を教えてもらってい
た。
ある日、つかさは雅己のお姉さ
んと買い物に出かけた。その帰り
道、ファミレスで知らない女の
人とお茶を飲んでる雅己を見かけ
る。つかさは雅己が浮気している
と思ってしまう。
その日の夜、つかさは雅己にい
きなり「別れてください!」と言
う。雅己はつかさの言葉に困惑し
てしまう。雅己はつかさに訳を聞
いたら、つかさは知らない女の
人と会っているところを見た!と話
した。雅己は、あの人は不動産屋
さん! バリアフリーの部屋を探
してもらっていたと説明した。つ
かさは涙を流しながら喜んだが、
これからは隠し事無し!と雅己に
言った。
数ヶ月後、つかさのお腹は大き
く目立つようになっていた。つか
さが部屋の掃除をしていると、雅
己の父親が紙袋を下げてやって来
た。紙袋の中に入っていたのは、
人名漢字の辞典だった。
数日後雅己とつかさは、雅己の
父親からプレゼントの人名漢字辞
典を参考にし、もうすぐ生まれ
てくる子供の名前を男の子でも女
の子でも「和実」と決めた。周り
の人を和ませるような人になって
ほしいという思いをこめて「和実」
と付けた。そのことを、雅己の両
親に電話で伝えた。その時雅己の
父親は電話で雅己と何も語らな
かったが、雅己の母親が雅己と話
している隣りで嬉しそうな表情を
していた。
雅己とつかさの結婚式の日が来
た。車椅子に乗ったつかさのウェ
ディングドレス姿は、とても綺麗
だった。式が始まったとたん、つ
かさのお腹の中にいる和実がつか
さのお腹を蹴る。そのことを参列
者全員で喜ぶが、つかさは急に産
気づく。産気づいたつかさを連れ

て、雅己とその両親とつかさの母親と結婚式に参列していたつかさの友人は急いで病院へ行く。

数時間後、つかさは和実を産む。和実は元気な男の子だった。和実の誕生をみんなで喜んだ。出産後のつかさも元気な姿を見せた。

しかししばらくして、つかさは「疲れた!」と言い眠ってしまった。その5日後、つかさは帰らぬ人になってしまった。つかさの死因は、急性妊娠脂肪肝という病気だった。急性妊娠脂肪肝というのは、妊娠後期に子宮が大きくなって肝臓に圧迫をかけて、肝臓に障害を起こす病気だそうだ。

つかさが死んで、はや5年。和実は母親がいなくて寂しさはあるものの雅己やその両親、つかさの母親、雅己の友人たちみんなに愛されながら育って行った。雅己は大きくなるにつれつかさに似てきた和実を、大切に育てていくと亡きつかさに誓うのだった。

◇

全体的にいうと、障害者の日常とその家族を描いた映画だ。大変だけど、明るく前向きに生きているつかさがよく描かれている。

この映画は事実に基づいている。どこまでが事実どおりに描かれ

ているのかわからないが、つかさと雅己以外の人の気持ちをもう少し描いても良かったのではないだろうか。

主な出演者は次のとおり。つかさⅡ北川景子、雅己Ⅱ錦戸亮、雅己の父Ⅱ國村隼、雅己の母Ⅱ角替和枝、つかさの母Ⅱ風吹ジュン。

つかさと私の共通点

この映画を見終わって、知人から「関口さんのことが思い浮かぶ映画があるよ」という言葉にうなずけた。わたくしとつかさには共通点があった。それも、3つもだ。

1つ目は、車椅子で生活していることです。つかさは交通事故で車椅子の生活になったが、わたくしは小児麻痺という病気が原因で障害者になった。今は手動の車椅子を利用していますが、電動車椅子を頼んでいるところです。たぶんこの文章が『シネマ気球』に載る頃には電動車椅子になっていると思います。

2つ目は、わたくしにも親しいタクシーの運転手さんがいるというところ。運転手さんというよりも、そのタクシー会社に親切にして頂いてもらっています。そのタクシー会社は、Bタクシーで

す。

Bタクシーの元専務の方がわたくしの住んでいる市町村の社会福祉協議会の会長をしていたんです。専務さんに、車椅子でも安心して乗せてもらえるタクシー会社がほしいと言ったのがBタクシーとの出会いのきっかけでした。

専務さんは、気にしないでいつでもタクシーに乗って良いよ!と言ってくれました。

Bタクシーの運転手さんたちは、良い人ばかりです。友人と言ってもいいくらい親しくさせてもらっています。買い物を手伝ってくれた運転手さんもあります。ケータイの機種変更の時、言語障害のわたくしの言葉をショップの店員さんに通訳してくれた運転手さんもあります。

そして、いちばん話が合う運転手さんがKさんです。Kさんも映画好きで、Kさんの車に乗ると目的地に着くまで映画の話をしていくこともよくあります。Kさんも、ほかの運転手さんたちも、僕にとつて大切な人たちです。

でもある時、あることでBタクシー会社に負担を掛けていると気づいたのです。専務さんは気にしないで良いよと言ってくれました

が、悪くて乗れない。そこでわたくしの地元の市の福祉事務所に相談してみたいです。そして、市とSタクシーがある市が助成してくれて、Sタクシーを福祉タクシーにしてくれたのです。福祉タクシーとは、障害者が安心して乗ることができるタクシーのことです。障害者側のメリットは、乗車拒否をされないことと、割安料金でタクシーに乗れるということです。タクシー会社側のメリットは、障害者を乗せたタクシーの運転手さんに市町村から手当てとして割り引いただけの金額がもらえるのです。

3つ目は、障害者のスポーツのポッチャをやっているということです。このポッチャというスポーツはペタンクを室内競技にした感じの球技です。ペタンクも知名度が低いと思うので、もう少し説明します。カーリングとボーリングを合わせた感じの球技で、赤いボールを投げる人と青いボールを投げる人が目的の白いボールにどれだけ近寄せられるかを競うスポーツです。自分で投げるのができない人は「ランブ」という雨樋に似た補助具を使ってやります。ランブを使う人には、アシスタント

が付きまします。アシスタントは、競技者の指示どおりにランプを動かします。アシスタントは、ボールが転がっているコート内を見ることはできません。もしアシスタントがコート内を見たら、ペナルティーを取られます。場合によっては、失格になることもあります。ポッチャは、オープン(中途障

筆者の近況

山下雄平 映画鑑賞のほかに、以前から画廊巡りをしていました。65歳になったら個展を開きたいと思っていました。念願かなって京橋の画廊で、6月に油絵中心の個展ができました。2年後を目標に、またやる気満々です。

今文明 去年の秋まで1年半の入退院を繰り返してようやく復帰。今は自宅療養を続けていますが、長い入院生活による体力の低下はいかんともし難いものがあります。でも、何度か臨死状態に陥りながら幸運にも生還したのですから、その与えられた命を大切に、少しずつ回復をめざしたいと思っています。みなさんとともに、また「シネマ気球」に参加できたことをとてもうれしく思います。私の健さん映画ベスト5は、①幸せの黄色いハンカチ②網走番外地③八甲田山④鉄道員⑤あなたへ。里中智子 毎日暑くてウンザリですが、食欲も体重もまったく減りそうもありません。元気な証拠と思ひ、厳しい夏を無事に乗り切りたいです。

害クラス)、BC1(立位クラス)、BC2(車椅子クラス)、BC3(ランプ使用クラス)、BC4(内部障害クラス)の5クラスに分けられています。

ちなみにつかさは中途障害だから、オープンクラスになります。わたくしはランプを使用しているのでBC3のクラスでやっています。

中田好美 「ペロクマフレンズ」という、LINEスタンプが発売中です。クマ、イヌ、ネコ、ウサギが揃っています。もしよかったら見てみてください。

門馬徳行 第二次大戦、独のダム崩壊を狙った英飛行中隊の実話『暁の攻撃』(1955)を見た。不屈の精神の作戦発案者と激しい訓練を重ね実行した搭乗員たちを描いた傑作。対空砲火のシーンなど、当時の映像技術ではやむを得ない描写もあるが、今般、あのビーター・ジャクソンがリメイクを狙っているそうなので素晴らしい作品にしてほしい気持ちでいっぱい。

岩館範子 西部劇『悪党に肅清を』を観た。ちゃんとした西部劇だった。ハリウッド作品ではなく、デンマークで作ったからかな。監督クリスチヤン・レヴリングが西部劇が大好きだったからかも。主人公はマッツ・ミケルセン、妻と子を殺され復讐すると言うもの。悪党は、ジェフリー・デイン・モーガン。弟が死にその妻エヴァ・グリーンが手に入りご満悦。石油が出た町を全て自分のも

す。

ポッチャは、いろんな大会があります。いちばん大きな大会は冒頭で書きましたけど、パラリンピックです。世界大会、アジア大会、日本選手権、地方大会、県大会などがあります。これは余談ですが、わたくしのランキングはBC3クラスの千葉県内3位という、中途

のにしようとする。主人公の兄にミカエル・パーシェブラントが出て。西部劇に合ってた。セルジオ・レオーネの『ウエスタン』を観た。悪役のヘンリー・フォンダもチャールズ・ブロンソンもいい。でもやっぱりジェイソン・ロバーズがいい。たまに観たくなる。藤井陽子 バイトにイラストに家事に交友に時々哲学の研さんに。なかなか充実したライフ。去年2月に我が家に戻ってきたハムスターのジャスミンは、かなりのやんちゃガールでタフボーイ(う)。ほぼ放し飼いで、部屋中を走り回り、家族と一緒にご飯やおやつを食べて、つま先から肩までよく登ってくる。おなかすいたら、早朝に手の指をあまがみして私を起こしにくるジャスミンに、スウィートな気持ちで目覚めることもしばしば。

堀江広子 七、八年前に中国清朝時代を舞台にした小説『蒼穹の昴』(浅田次郎著)を読んだ時から、中国には関心があり、国策映画っぽくない作品を待ち望んでいました。予想を遙かに超える見ごたえのある作品に感

半端なところにいます。

ポッチャが出てくる映画は『抱きしめたい』だけ。自分がやっているスポーツが映画の中に出てくる。そして、親しいタクシーの運転手さんも出てきました。とても親近感が湧いた映画でした。

激しました。次は韓国映画にしようかな。目下の楽しみは、夕べの晩酌時に世事についてああでもないこうでもないという夫と喋りあうこと、ネコと散歩しながら、朝顔、百日草、千日紅の生長ぶりを見てまわること。関口健一「ゴールデンウィークに『映画ビリギャル』を見に行きました。自分に合った勉強方法で、楽しく学ぶのがいいな」と思いました。ギャル姿の有村架純も、可愛かった。久保嘉之「ふとした切っ掛けで、タクシーのお客さんであるお婆ちゃん、短歌集自費出版のお手伝いをする」となりまして。いやあ本を出すのがこんなに大変だったとは、初めて知りました。でもいい勉強になりました。お婆ちゃんも喜んでくれたし、結果おーらいいうことで。

関田孝正 昨年「昭和屋映画屋渡世」を出版。元書店員の方から「勘」としていける!」とのお墨付きをいただき、なおかつ毎週のように注文のFAX。これは重版できるかなと淡い期待。が、ここへきて動きがぱったり。気長に売っていくしかない。

N雄とN子のシネマ対談
『薄氷の殺人』(監督=ディアオ・イーナン)
迷路を彷徨う男と女

*ネタバレトークをしていますので注意してください。

N子「ミステリーだけど、行き場のない男と女の悲しい話だったね。」

N雄「ファム・ファタル(運命の女)の要素もあるがそれだけじゃなくて、複雑な印象がある作品だったよ。」

N子「だって、ミステリーとしてら、詰めがあまりいところが多いよ。」

N雄「犯人の割れ方や連続殺人の様子もせりふだけだし、ジャン(リヤオ・ファン)の行動

「タイトルは、原題の『白昼の花火』の方が合ってるが、これは中国ノワールの誕生だと思う」
も俯に落ちない部分もあるしな。」

N子「彼が、なぜバスの中でスケート靴の男が気になったのか、尾行したのかも釈然としないね。」

N雄「たぶん、スケート靴を履いたまま切断された足がでてきたからだろう。」

N子「全体を通して迷路を彷徨っているような雰囲気があったね。」

N雄「同僚の刑事が残したメモは路線バスの番号だったのだろう。ほとんど説明がないから、唐突感が残る。」

N子「ジャンが直感でリアン(ワン・シュエビン)が生きていると思ったところもね。」

N雄「ジャンの同僚刑事がなぜリアンが怪しいと尾行していたのか、などなど。大胆な省略が多い。」

N子「それと、いくら元刑事と言っても、自分の仕事もしないで事件の調査にのめりこむな

んで、できないでしょう。」

N雄「飲んだくれでやる気がなかったからな。どうでもよかったのだろう、仕事なんて。」

N子「ジャンは奥さんに離婚され、捜査中に怪我をして警察を辞めてる、まあ、一見、負け犬のだらしない男に見えるよね。」

N雄「自分でも自覚していて、なんとか負け犬から抜け出したに思っている。」

N子「彼が謎の女、ウー(グイ・ルンメイ)に惹かれていく気持ちはできていたけど、肝心の彼女の気持ちあまり伝わってこない。」

N雄「せりふを極端に削った独特の演出で、すべて映像で語るうとしている。当然、うまくいっている所と、中途半端になっっている所があるな。」

N子「ウーは、運の無い自分を捨てているようだから、男の好意も素直にはとれないだろうね。」

N雄「表情をほとんど変えない彼女がそれを物語っているのだろう。」

N子「じつと見つめていないといけない、気が抜けない作品だったね。」

N雄「映像は胸に迫ってくるものがある。石段をこがるビンとか急にでくる馬とか、広い電車の中の座席とか。」

N子「あの座席は公園のベンチだったよ。2009年の冬になつてからは寒そうなシーンが続いたよね。」

N雄「凍った道だったり、吐く息が白かったりほんとに寒くなつてしまった。」

N子「それに冬のスケート場が出てきたから、なおさらよ。」

N雄「町のネオンや騒音、雪道を踏みしめる足音、スケート場の音楽だったり、色彩や音は効果的に使っていたな。」

N子「拳銃の音は乾いた感じだった。空気が凍っているとあんな音になるのかな。」



『薄氷の殺人』ポスター

N雄「2人が滑るスケート場のシーン

は凄かったな。吐く息や氷を滑る音、極彩色の色彩、独特のカメラワーク、あんな映像空間は真似できないだろう。」

N子「1999年から2004年に場面転換するシーンも凝っていたね。トンネルを出ると雪が降って飲んだくれたジョンがいると、もう年が変わってる。」

N雄「単にストーリーを追うのではなく感覚的に時間を捉えてほしいのだろう。」

N子「カメラで勝負する監督だね。」

とても中国映画とは思えないむしろフィルムノワールっぽい作品に思えるね。」

N雄「フランス映画もどきのムードもあったな。」

N子「ウーに近づいた2人の男が殺されたわけなんだけど、そこも語られるだけで映像的な説得力はなかったね。」

N雄「だったら、クリーニングの店主も狙われていいはずだが。そうするとウーが生活できなくなるか。」

N子「ウーの夫リアンは自分が死んだことにして、彼女を助けるわけだから、そんなことは

よほどの愛情がないとできないよね。」

N雄「でも、ラスト近くでウーは自分を守るために夫を裏切る。悪女と言えそうだが、そうかんたんに言いきれない。」

N子「ウー役のルンメイは悪女というよりは薄幸な女といったイメージの方が強いよね。」

N雄「こういう事情だったら自由に動けないからな。人生、投げてやるよ。その点ジャンとは共通点がある。」

N子「真相を知ったジャンは結局、彼女を警察に渡す。好きだったら彼女と逃げるといふ展開も考えられるけど自分の利益を取ったわけだね。」

N雄「手柄を立てれば刑事に復活できるし、よほど負け犬になりたくなかったんだな。」

N子「最後のジャンのダンスはなんだろうね? 急に踊りだすから。」

N雄「復活できた、といった喜びを表現したのか、あるいは踊り狂っていたかったのか。」

N子「ラストの花火はジャンが上げたんでしょう。ウーはわかってたみたい。」

N雄「だろうな。ジャンのウーに

対する愛の証拠に上げたんだと思いたい。」

N子「君を警察に売ったけど、でも、愛してるよと言いたかったのかもね。」

N雄「不条理というか、自分勝手というか割り切れない人間の行動をよく描いてると思う。」

N子「『罪の手ざわり』でも普通の人びとが生きたために罪を犯してしまう現代中国の世界が描かれていると言われているが、この作品でも豊かでない地方社会が描かれていて興味が尽きないね。」

N雄「もともと中国の人たちがどんな生活してるなんて知らないからな。」

N子「おいしそうなお粥とか肉まんがでてきたけど、相当、好きみたいね。」

N雄「一言でいうと、中国ノワールの誕生だ。日本でもぜひ日本ノワールの傑作を作ってほしいな。」

※N雄 89点、N子 88点



『ブレードランナー』礼讃

久保嘉之

数多あるSF映画の中にあつて、リドリー・スコット監督の『ブレードランナー』は、構築された世界観の異質さと圧倒的な映像美によって、見事金字塔を打ち立てた作品である。

制作されてから三十三年経った現在でも、私のその認識は変わっていない。

この映画を観た時の衝撃は、今思い出すに相当なものだった。光と影を意のままに操って描き出される映像美に魅了され、機能的で清潔感溢れるであろう未来社会を一転させ、体中徴だらけになり、そうなるほど降り続く酸性雨のもと、

東洋と西洋の文化が融合ではなくて、でんばらばらに存在する多国籍化した、それも薄汚れたと形容したくなるほどの世界観に翻弄された。退嬰的ではあつても、生きとし生けるものが放つ熱気と呼べるほどの活力に充ちた街、ロサンゼルス。

これが私とスコット監督との初めての出会いであつた。実は監督にはこの『ブレードランナー』の前に『エイリアン』という、こちらの方が他の監督たちによってシリーズ化されているということもあつて、人口に膾炙されているであろう作品を撮っているのだが、当時の私は怪獣映画？ があまり好きではなく、観たのはかなり後になってからである。『エイリアン』も『ブレードランナー』とは違った意味でSF映画の傑作であり、自身の食わず嫌い、認識不足を悔やんだものである。

しかしこれほどの作品でありながらも封切り当時は、さほどヒットしなかった。私が観たときも観客は疎らだった記憶がある。ほぼ同時に封切られたスピルバーグ監督の『E.T.』に食われたという説が有力らしいが、派手なアクションが多いわけでもなく、何より

それまで出会ったことのない異質で退廃的な未来の世界観が、おそらく受け入れ難かつたのではなからうか。それがビデオ化されてから、カルトなファンの間で徐々に人気が高まっていったという。スコット監督の映像世界は、常に先をいつている。だからついていくべき観客の方が遅きに失する傾向が、間々見受けられるようである。これなどその顕著な例ではなからうか。

『ブレードランナー』は制作の段階から、実に様々な波乱を内包していた。

リサーチ試写の際「内容が判りにくい、暗い」という会社側のクレームで、スコット監督自身釈然としながらかも、ナレーションとラストシーンを付け加えさせられたのである。ナレーションは、主人公であるデッカーを演じたハリソン・フォードによるもので、その時々状況やデッカーの気持ち、より詳しく述べている。ラストシーンは、デッカーとレイチェル（ショーン・ヤング）が二人して逃げ出すべく、エレベーターに乗り込み、そのドアが閉まる——そこで本当はエンドマークだったのだが、レイチェルが従来

の四年しか生きられないタイプのレプリカント（アンドロイド）とは異なり、新型の細胞組織ゆえに人間並みの寿命を持つという朗報を、デッカーのナレーションで知らしめながら逃避行に就く、という部分が加えられているのである。

そのラストシーンだが、時間的にも予算的にも撮り直すことは出来なかつたのだらう、スタンリー・キューブリックが監督した『シャイニング』のオーブニングの残りを使用したという話は、今ではマニアの間で語り草となっているほどらしい。しかしながら他人が撮ったフィルムを使用せざるを得なかつた状況は、スコット監督の矜持を大いに傷付けたことであろうことは、想像に難くない。

だが幸いにも十年後の一九九一年、リドリー・スコット監督自身が再編集した所謂ディレクターズカットによる『ブレードランナー 最終版』が上映される運びとなる。

実は前述のリサーチ用フィルムが偶々発見されたのが切っ掛けらしいのだが、本編がビデオ化されて以来、回りの人気が異様に高まっている状況でもあり、会社も再上映しても採算が採れると踏んだのであろう。その話を切り出すと、

スコット監督は、

「リサーチ用編集バージョンは、あくまで未完成のものだから、公開を承認することは出来ない」そして、それはビジネスの問題ではなく芸術の問題だ、とまで言い切ったという。但しである、初映の折いたく矜持を傷付けられたであろう監督らしい、提案をする。「監督である私が、自分の思うように編集したものであれば、公開してもいい」と。——十年経って漸く自らの意に沿う作品に、仕上げる事が出来たことになる。

しかしである。再編集したがために、かなり大きな変更が生じたのである。と一般にはいわれているのだが、とりあえずその〈変更〉は後ほど述べるとして、先ずは物語を紹介しておこう。

* * *

原作は、フィリップ・K・ディックによる『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』(こちらも映画とは違った意味で傑作である)。

通常原作つきの映画の場合、特に映画が原作により忠実に作られている場合、映写時間の関係等から、どうしても物語の筋をなぞるだけに終始してしまい、観終わっただけ、稀薄な感じだけを受けてし

まう。砂を噛むような味気なさだけが残るのである。

もつとも、これは原作を先に読んだ場合に受ける印象だから、それだつたら映画を観ないか、原作を読まなきゃいいじゃないかといわれると、「ごもつともです」と頷くよりほか返す言葉がないのだが、やはり面白そうだなと思つた作品は、原作も読みたいし映画も観たい貪欲な性分だから、どちらも面白くあつて欲しいのだ。また原作と映画とがそれぞれに持つ醍醐味を、比較して楽しむのも格別なものののである。

『ブレードランナー』は、原作のオリジナルティーを損なわないようにしながらも、うまく換骨奪胎してまったく違った物語に仕立ててある。こうでなくちゃいけない。

基礎知識は次の通りである。二十一世紀アメリカのタイレル社は人間そっくりのネクスス型ロボットを開発、中でも六型と呼ばれるタイプは体力も敏捷性も人間に勝り、知力もそれを造つた技術者に匹敵するほどであった。彼らはレプリカントと呼ばれた。感情以外は人間と全く同じ、否はるかに凌駕さえしていたが、その感情ですらある期間を経ると、芽生えてく

るといふ。それを恐れた人間は、

四年の寿命という安全装置を彼らに組み込んだ。元々人間を使うことが躊躇われる地球外基地での奴隷労働や、他の惑星の探検などに従事させていたのだが、或る時感情を生じせしめた戦闘型レプリカントが、人間に対し反乱を起こしたのである。「人間と同じであるならば、なぜ自分たちだけが、危険な仕事を引き受けなければならぬのだ」「いやまだそれは許せるとしても、なぜ長く生きることが許されない!」彼らの言い分、文字通り感情の発露は、当然のものであつたろう。しかし人間はそれを認めなかった。レプリカントの内、地球へ戻つて来たものを捜し出して始末する役目を担つたのが、ブレードランナー特捜班と称される面々で、デッカー(ハリソン・フォード)はその一員であつた。

因みに、面白い余談をひとつ。封切り当時販売されたパンフレットの(撮影うらばなし)に載つていたのだが、

『ブレードランナー』というタイトルは、それがきまつたあとになつて、同じ題の小説がほかにあることがわかり、プロデューサーたちをあわてさせた。アラン・E

・ナースによつて数年前に書かれたその小説もSFもので、未来のある貧しい社会が医薬品の供給もままならぬため「ブレードランナー」たちによつて薬を密輸入するというストーリーなのだが、どうしてもこのタイトルを映画にしたいため、プロデューサーたちはナースに懇願して承諾をとるといふ努力までした。」そうだが、タイトルは重要、その思いは判らぬでもない。

筋立ては、右記の背景からも推察されるように、地球に舞い戻つた四人のレプリカントを、デッカーが退治? していくという、比較的シンプルなものであるが、光と影が交錯する映像のように、そこには複雑に絡まり合い纏れ合つた愛憎という、『感情』があつた。

二〇一九年、天然ガスの炎が噴き上げ、サーチライトの光芒が目まぐるしく動くロサンゼルスの上空を、妖しき光の塊かと思しき様々なスピナー(未来カー)が飛び交う劈頭と、それに続く要塞かと思ふ紛うばかりのタイレル社(レプリカントを製造する大会社)の威容を誇る建物を映し出したシーンに気を吞まれ、特にこのあとデッカーが同僚のガフ(エドワード

・ジェームズ・オルモス」と共に訪れるシーンで再度映し出された、夕焼けのオレンジ色というより金色に輝く背景に彩られた建物の圧倒的迫力に、私は息を呑んだ。

そのタイレル社の一画で、従業員として潜り込んでいたレプリカントであるリオン（ブライオン・ジェームス）を炙り出そうとしたブレードランナーであるホールデンが、逆に射殺されてしまったのである。その捜査のためであった。

この時デッカーはすでに特捜班を引退していた。それを、適任者がいない所為もあり、かつての上司であるブライアント警視（M・エメット・ウォルシュ）が、

「警官じゃなきゃ、只の人間だ。こっちは何とでも始末できるんだぞ」

「俺は辞めたんだ」デッカーは続けて「俺は昔と違うんだ。なめんなよ」

「逆らう気か？ 権力には勝てんぞ！」

部屋を出て行きかけたデッカーが戻ってきて、「強制か」ブライアントはおもむろに「そうだ」——強引に任務に復帰させたのである。

なぜデッカーは、引退したの

だろう。レプリカントの気持が判るから、彼らに感情的に寄り添ってしまふから、原作で呼称するところのバウンティ・ハンター（賞金稼ぎ）としての非情・無慈悲さに徹しきれず、彼らを「狩る」とに迷い躊躇ってしまうから、そういう自分を持って余ってしまうから……ということが、内容が進むにつれ明らかになってくる。

デッカーのみが案内されたタイレル社の社長室、先ず出迎えたのは大きなフクロウであった。その目は撮影の方法によるのだろうが、ガラス玉のように生気がなくそれだけに不気味で、これもレプリカントなのかと思えるほど禍々しかった。

ここで原作の一部を紹介しておく。「もういまでは、なぜ戦争が起ったか、また、どっちが勝ったか——もし勝利者があるとすればだが——そんなことをおぼえている人間はひとりもない。地球表面の大半を汚染した死の灰は、どこかの国のだれかが——戦時中の敵国さえもが——計画的に作り出したものではなかった。第一番に、どういふわけかフクロウが死んでいった。むくむく肥った白い鳥の死骸が庭や街路のあちこちに横た

わっているところは、その当時ユーモラスな光景にさえ思えたものである。（中略）だが、新しい疫病は天降ってきたのだ。」『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』フイリッパ・K・ディック著、浅倉久志訳。

レプリカントと人間を見分ける検査に強い興味を持ったタイレル博士（ジョー・ターケル）のたつての依頼で、デッカーはレイチエルを対象に検査を行うことになる。

全面総ガラス張りの窓の向こうに広がる圧倒されんばかりの色彩を放つ夕焼けを背景に、彼はレイチエルに、顔面の毛細管反応や瞳孔の散大・虹彩の拡張など、幾つかの質問を投げかけることで生じる反応によって、レプリカントであるかどうかを見分ける為のフォークト・カンフ検査を試みる。

（因みにこの検査は、オープンニングでホールデンが、リオンに対して行うのと同じものだが、質問の内容が主として生き物を題材にしたものに限定されている。その応答によってこの時代、殆どの生物が死滅してしまっていることが、類推できるのである）。

「明るすぎる」というので、ブラ

インドが徐々におろされ、検査が開始される。その時に綾なす光と影のアラベスクは、もう魔術というよりほかはなく、それが自分とは人間であるとそれまで信じていたショーンが、「もしかしたら？」と疑念を持ち始める顔の表情と見事に調和して、忘れられないシーンとなった。

この時私は、リドリー・スコット監督の映像美に、特に光と影が織り成す陰影の見事に、イタリヤはカラヴァジオの明暗法による写真主義を自家薬籠中のものとし、更にそれらを進化させた（光と影による独自の世界）を創り上げたオランダの画家レンブラント・ファン・レインを、想起せずにはいられなかった。

まだある。例えばJ・F・セバスチャン（ウィリアム・サンダーソン）の、過疎が進み半ば廃墟と化した感のある高層ビルの住居。

ビルの中や、また彼の部屋の中を漂う、青みがかった靄や、時折それらを断ち切るように動いていくサーチライトの青い光に、やはりオランダ生まれで淡いウルトラマリンとレモンイエローの色遣いを得意とし、後に青の画家と呼ばれるヨハネス・フェルメールの影

響を、私は疑った。生前の評価は低かったとはいえ、彼もまた陰影の表現に巧みな人だった。ウエスト・ハートブルプール美術大学と、ロンドンの王立美術大学に学んだという、リドリー・スコット監督の経歴に照らし合わせてみれば、あながち見当はずれな推測でもないのではなからうか、と思う。ただそう考えると、ロイ・パッティ役にオランダ出身のルトガー・ハウアーを起用したのも、単なる偶然とは思えなくなるから、可笑しなものだ。——爾来、監督の作品を観るにつけ、どうしても私はレンブラントの世界観と重ね合わせてしまうようになってしまっている。

V・K検査でレイチェルがレプリカントであることを見破った後の、デッカードとタイレル博士の会話、

「彼女も(自分がレプリカントであることを)薄々感付いてはいるらしい」

「本人が知らないなんてことが、あるんですか!」デッカードは驚く。

タイレル博士は続けて「我社では人間に近いレプリカントの完成を目指している。レプリカントは今、何かにとりつかれて焦れて見

える。彼らの短い生体験では、感情的にも未熟で、自分をどう処しているのか判らない。だから彼らに過去を与えねばならない。それが感情を吸収するクッションとなる、我々が制御するにもずっと楽になる」

「過去——記憶を与えるわけですね」

帰宅したデッカードを追いかけるように、レイチェルが姿を現す。自分がレプリカントだと信じられない彼女は、幼い頃母親と一緒に写したものだといって一枚の写真を出す。そしてその頃の思い出を語ろうとするが、デッカードが先回りしてすべて言ってしまう、やおら止めを刺すように、

「移植されたタイレルの姪の記憶だ」

自分は人間ではなかった。レイチェルは完全に打ちのめされてしまい、部屋を飛び出してしまう。彼女が残っていた写真を眺めながら、

「タイレルも随分と手の込んだことをするもんだ。古い写真なんか持たせてその気にさせるとは……罪な話じゃないか。(中略)」

なぜレプリカントは写真を後生大事にためておくのか。その訳は

レイチェルと同じ、自分の過去が欲しいんだ」そう呟くデッカード自身、自分の部屋のピアノの上に、沢山の写真を飾っているのである。ならば彼もまた、レプリカントなのだろうか。

リオンのホテルの部屋から発見した写真を手懸りに、スネーク・ショーのダンサーのなりすましていたゾラ(ジョアンナ・キャシディ)に迫り着いたデッカードは、危うく殺されかけながらも彼女を追いつめ、ブラスターと呼ばれるレーザーガンで射殺する。

背後から撃つたことで後ろめたさを感じつつも、ホッとし息吐く間もなく、その場に居合わせて一部始終を見ていたリオンに、今度はデッカードが襲撃される。ブラスターを叩き落され、車めがけて投げ飛ばされるデッカード。繰り返すがネクサス六型のレプリカントは、体力・敏捷性ともに人間の及ぶところではない。なす術もなく頭を絞められあわやという寸前、ブラスターを拾い上げリオンの頭部を撃ち抜いたレイチェルによって、助けられる。彼女はデッカードの誘いに乗ってバーへ向かう途中、偶々現場に行き合わせたのである。

——デッカードの部屋へ戻って来た二人。この折、彼の挙動を見詰めていたレイチェルは、もしかしたら彼もレプリカントではないのかという思いに、とらわれる。そしておもむくに「あなたもV・Kテストを受けたことある?」と問いかけるのだが、この時彼女の精神状態は、リオンを射殺した衝撃と、次は自分がブレードランナーに狙われるという恐怖のため、些か惑乱気味だったことは否めない。だからデッカードも私と同じレプリカントであって欲しい、という切なる願望が縋い混ざっていたには違いないのだが、それでも確かにこの時点では、彼女は彼を疑ったのである。

疲れきって寝入ってしまったデッカードの傍らで、レイチェルはピアノを弾く。纏めた髪をほどいて自然に戻した彼女の隣に、目覚めたデッカードが座る。

「ピアノの音が聞こえた」

「私が弾いたの。……習ったのはタイレルの姪かもしれないけど」

レイチェルは、彼女を作ったエルドン・タイレル博士の姪の記憶を、移植情報として持っていたのである。即ち、それがレイチェルの過去であった。

「上手だったよ」

レイチェルにキスしようとするデッカード。彼女は拒み、部屋を出て行くとする。ドアを抑え、彼女を壁に押し付けたデッカードは、強引にキスをする。

「今度は君からだ」おそらくデッカードは、レイチェルに対して自分の気持ちに正直になれ、そう言ったのだと思う。彼女は確かに、彼に好意以上の気持ちを抱いていた。だが彼女の口を突いて出た言葉は、

「私はだれ？ どうしたらいいの？」僅かばかりのタイレルの姪の記憶を、自らの過去としてしか持ち得ないレイチェルのアイデンティティは、風になびく葦よりもお頼りないものであつたろう。感情が芽生え始めると同時に覚えだしたのであるこの疑問は、また根源的な恐怖でもあつたのである。

「キスしてと言え」「キスして」「抱いてと言え」「抱いて」鸚鵡返しに応える彼女。だが「もう一度」「抱いて——私を離さないで」遂にレイチェルの感情は、臨界を越え奔騰する。

一見乱暴極まりないシーンのようにうでいて、実に胸に迫るラブシーンである。レイチェルの哀しきと

戸惑いに、私は言葉を失った。人間心理の細やかな機微、それすら演出で表現してしまうリドリー・スコット監督の力量に、知らず怖さを覚えた

一方、植民地惑星を逃げ出してきたレプリカント四人のリーダー格、ロイ・バットイ（ルトガー・ハウアー）である。彼はタイレル社の社員で、タイレル博士のチェス仇であるJ・F・セバスチャンを捜し出し、そのついで強引に博士との面会を果たす。

バットイの望みは唯ひとつ。四年と限られたものではなく、人間並みの寿命を得ることだった。それが叶えば人間と同じく、否人間として生きていくことができる。

彼の知力も、彼を造った技術者に匹敵するものであつた。細胞学的レベルにおける延命の可能性を縷々タイレル博士に質すが、悉く否定されてしまう。途は鎖（とら）されてしまったのである。タイレル博士は、

「残された時間を精一杯楽しむことだ」優しく諭す。だがそれが火に油を注ぐ結果となった。絶望の淵に立たされたバットイの、瞋恚（しんい）を燃え上がらせてしまったのである。彼は博士の顔を両手で挟むと、

信じられない力で押し潰してしまふ。セバスチャンはその光景に怖れをなしその場を逃げようと右往左往する。ただレプリカントのフクロウだけが、ガラス玉のような虚ろな目ですべてを見つめていた。……タイレル社の社長室でタイレル博士とセバスチャンの死体が発見されたニュースを聞いたデッカードは、レプリカントの仕業だと見当をつけ、すぐさまセバスチャンの家へ向かう。そこへ潜み隠れていたプリス（ダリル・ハンナ）を悪戦苦闘のすえ斃したところへ、バットイが帰ってくる。愈々最後の闘いが始まるのである——

ここで保留しておいた、リドリー・スコット監督がリサーチ用フィルムを再編集して生じた（変化）について、述べよう。

当然、監督の意志に反して加えられたナレーションと、エレベーターのドアが閉まった後のラストは、カットされている。

それ以外では、デッカードが転寝した時にユニコーン（一角獣）の夢をみるシーンが、付け加えられている。（因みにこのシーンは、スコット監督自身の作品『レジェンド・光と闇の伝説』から、流用

されたものだといわれている）。これに、ラストで部屋の前に置かれたユニコーンの折り紙で、何とガフが夢の内容を知っているという事実（？）に気付いたデッカードが愕然とするシーンを併せたものが、生じた（変化）である。即ちデッカードがレプリカントである可能性が出て来たというのだ。

確かに有り得ない話ではない。そのことは認めよう。

しかしながら原作の中に、主人公がレイチェルをアンドロイドだと看破した後、次第に人間より人間らしい彼女に惹かれていくようになる過程が描かれ、またその間、人間以下の人間と接し、人間以上のアンドロイドとの出会いを重ねていくうち、アンドロイドと人間の区別が付けられなくなっていく自分を感じ、本当は自分もアンドロイドではないのか、という疑問に悩まされ出す、というシークエンスがあるのである。実際同じ賞金稼ぎのフィル・レッツに頼んで、自らフォークト・カンブフ検査を受けたりもする。結果はある特定のアンドロイド（レプリカント）に対しては、強度の感情移入反応を示しはするものの、人間であることに間違いはなかった。脚本を

担当したハンプトン・ファンチャ―とデビッド・ピープルスは、当然この原作を基として稿を起こした筈であろうし、エンド・クレジットのあと「この映画を、フィリップ・K・ディックの思い出に捧げる」という献辞が寄せられるほどであるから、リドリー・スコット監督自身も、原作者の意向を大切にしたのでは、と考えられるのである。

また、原作のあとがきで訳者の浅倉久志は、後藤将之の『フィリップ・K・ディックの社会思想』と題する評論を取り上げ、

「ここにディックのもっとも基本的な世界認識がある。ディックにおいて、人間とアンドロイドの生物学上の、あるいは自然科学上の区別は、まったく無意味である。親切的な存在はすべからず『人間』であり、それ以外は人間ではない。ここで彼が、この非人間的性質の比喩としてのみ、『アンドロイド』を持ち出している事を失念してはならない。ディックは、『アンドロイド』と『人間』の形式上の区別には関心が無い。コピーも原物も親切であればすべて本物である」と述懐しているが、まさしくディックのこの認識こそが、デッカーもレプリカントではないのかと

思わせる、遠因だったのではなからうか。

——「アンドロイドも夢を見るのだろうか、とリックは自問した。見るらしい。だからこそ、彼らとはときどき雇い主を殺して、地球へ逃亡してくるのだ。不毛な岩だらけの荒原、もともと居住不可能な植民惑星で汗水たらして働く奴隷労役のない、よりよい生活を求めて。」原作の一節である。ならば『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』とは……

変わったタイトルであるが、このタイトルを映画に即して意識すると、『人間と同じように、(制作後数年を経て感情を生じせしめた)レプリカントは、(移植情報を過去として与えられた記憶で)、ユニコーン(人間らしさの象徴)の夢を見るのだろうか?』ということになるうか、と思う。リドリー・スコット監督は実はこのタイトルの中にこそ、レイチェルのみならず、バッチイやリオンたちが痛切に願った人間らしく生きたいという思い、まさしく哲学的命題ともいえる意味が込められているのを汲み取って、見事に映像化した——私はそう解釈している。

またそう解釈したほうが、デッ

カードとバッチイの対決が、映画史的にもより重要な意味を持つてくるのではなからうか。人間らしく生きたいと希い、人間らしい扱いを求めたバッチイと、レプリカントに感情移入しすぎるが故に、俺は本当に人間なのか? と自分自身を疑ったデッカーの、已むに已まれぬ対決。

つくづくバッチイを演じたルトガー・ハウアーの演技力と存在感は、すごいと思う。彼のお蔭でこの闘いが、映画史に残る名シーンになったのではないか、そう私は思っている。

仲間をつぎつぎと斃され、最後のひとりとなったバッチイも、死にかけていた。軀もすでに動かなくなりつつある。だが最後の力を振り絞っても、人間に伝えなければならぬことがある。バッチイは五寸釘よりももっと大きな釘で、自分の掌を貫き通す。

「まだだ! あわや消えなんとする命の炎を掻き立て、もう少しだけ持ちこたえてくれ!」それは死にゆく自らの細胞に活を入れ、闘いの間だけでいいから生きさせてくれという、必死の願いであった。彼は猫が鼠をいたぶるように、デ

ッカーの指の骨を折り、闇雲に

追い回す。恐怖を、自分たちが奴隷時代に味わった連続する恐怖の一部でいいから、体験させようとするかのよう。

デッカーを翻る行為は、途半ばで死んでいった仲間たちの無念を背負い、自らの命も間もなく終えようとする絶望の咆哮でもあった。

「残された時間は……俺はどこから来て、どこへ向かうのか」

疲労困憊、力尽きてビルから落下しようとするデッカーを、弓手に白い鳩を持ち、釘が刺さった儘の右手で引き摺り上げて助けたバッチイは、彼の前に腰を下ろし、「お前ら人間には信じられぬものを、俺は見えてきた。オリオン座の近くで燃えた宇宙船や、タンホイザー・ゲートのオーロラ……そういう思いでもやがて消える。時が来れば、涙のように……雨のように……」呟くように、歌うようにいとうと、「その時が来た」とはにかむような笑みを泛べ、ゆつくりと頭を垂れ、眠るように死んでいく。その手から白い鳩が飛び立つ。恰もバッチイの魂を天上に運ぶかのように——

「俺たちも人間なのだ」確かに声なき声が聞こえた気がした。

摩訶不思議なタイムトラベルもの

卵が先か鶏が先か？ どちらが先にこの世に存在したのか明確に答えられるだろうか。やはり卵でしよと言ふ人は、その卵はどうしてできたのかと聞かれたら――。

この映画もそんな疑問を改めて抱かせる摩訶不思議な面白さに満ちている。イーサン・ホーク演じる航時局員は、時間を旅して移動できる部署のメンバー。危険なテロリストを追いかけて未来の世界からやってくる。おなじみのタイムトラベルもの（時間SF）のひとつだ。「ターミネーター」「バック・トゥ・ザ・フューチャー」など同種の映画は枚挙にいとまがない。過去や未来への行き来が自由にできたら、面白いに違いない。

タイムトラベルものには約束事がある。過去に移動した事実があれば、そこで過去の歴史は変わり、未来の歴史も変わってしまう。そこで歴史を改変しないなどルールをもうけなければならない。極端な例だが、過去に行つて自分の親を（あるいは自分自身を）殺すよ

うなことがあったら、自分の存在はその時点で消えてしまう。その時点から自分が将来存在しない世界が生じることになる。今まで自分が生きてきた世界は何だったのか。もうひとつ別の世界（パラレルワールド）が存在するのだと説明されても理解しがたい。やつぱりどこかで無理が出てくる。辻褄が合わなくなる。この手の映画は面白いのだが、深く考えると楽しめない。製作側の敷いたレール（辻褄合わせ）になるべくおとなしく乗ることが楽しむコツだ。

話に無理のあるタイムトラベルものを、なぜ観客は好むのだろうか。やはりやり直しができない人生を現実を我々は甘受しなければならぬせいではないか。あのときああすれば、こうすればということとは誰しもある。人生の選択肢はいろいろだ。岐路に立つごとにどちらか行先を決めていかなければならない。それがよかったのか悪かったのかは、後にならないうわからぬ。後悔をいくつもしながら人間は生きている。そんな想いをひととき解消してくれるから、

タイムトラベルものは成立するのではないか。映画のなかでさえ、自分の思つた未来を実現するため何度も過去へ行つて歴史をいじくりまわす。「ミッシェン…8ミニッツ」「バタフライ・エフェクト」などがそう。どちらも恋人の命を救い出そうとするために過去を改変する。「ミッシェン――」は歴史を変えることに成功するが、「バタフライ――」は改変するたびに悪い方向へ行つてしまい、結局彼女を幸せにするためには出会いそのものを封じるという結末を選ぶ。運命は変わらないのだと映画は教える。運命は切り拓くものという、前向きな考え方こそがハリウッド映画の真髄だが、たまにそうでない映画が出てくると面白みを感じる。運命には抗えないのではと。この映画も、テロリストを過去に遡つて退治しても、多少歴史は変わるものの大筋では変わらないという立場をとる。

冒頭で爆弾魔と航時局員の争いがあり、爆弾魔は顔に火傷を負つて未来へタイムワープ。整形してバーテンダーとして1970年の世界へ。カウンター越しに男の客から話を聞く。男は、昔少女だったという奇妙な話を始める。思わ

ず引き込まれてしまう。――捨て子として養護院で育てられる。喧嘩っ早い性格をもち、長じて政府の宇宙プロジェクトの候補（飛行士の慰安婦）として採用される。成績は優れていたのだが試験に落ちてしまい、普通の学校に通つて勉強することに。そこで男と知り合い恋に落ちる。子供が生まれるが、何者かにさらわれてしまう――。そして、いろいろな驚愕の事実が明らかになる。その事実をつまびらかにしても文章ではよく理解できないかもしれないし、それを説明すると映画を見る楽しみがなくなってしまう。ここではタイムマシン（ギターケースに入ること）が面白い）によつて過去の自分と出会つてしまつただけ言つておく。

ゲームであればリセットしてやり直すことができる。しかし、人生はそういうわけにはいかない。すべて一発勝負だ。後悔してもはじまらない。常に明日が来る。われわれはその未来に向かって生きていくしかない。原作はロバート・A・ハインラインの「輪廻の蛇」。脚本・監督は双子のスピエリッダ兄弟。

（関田孝正）